

浦幌町立博物館

紀要

第23号

『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
(1972～1996) 継続



BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

2023

3

北海道
浦幌町立博物館

浦幌町立博物館所蔵の2022年度採集の蝶標本

荒川和子¹⁾

Kazuko ARAKAWA, 2023. Butterfly 2022 collection of The Historical Museum of Urahoro

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 23: 1-10

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
アゲハチョウ科 Papilionidae						
ヒメウスバアゲハ <i>Parnassius hoenei</i> (SCHWEITZER, 1912)						
1875	2023-	30	1	59	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 3 荒川和子
ミヤマカラスアゲハ <i>Papilio maackii</i> MÉNÉTRIÈS, 1858						
1876	2023-	31	1	78	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 6. 7 荒川和子
キアゲハ <i>Papilio machaon</i> LINNAEUS, 1758						
1877	2023-	32	1	64	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2022. 5. 21 荒川和子
1878	2023-	33	1	76	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 19 荒川和子
1879	2023-	34	1	80	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 7. 21 荒川和子
1880	2023-	35	1	85	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 9 荒川和子
シロチョウ科 Pieridae						
モンシロチョウ <i>Pieris rapae</i> (LINNAEUS, 1758)						
1881	2023-	1	1	41	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 5. 7 荒川和子
1882	2023-	2	1	48	北海道十勝郡浦幌町住吉町	2022. 8. 11 荒川和子
1883	2023-	3	1	45	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 1 荒川和子
1884	2023-	4	1	46	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 9 荒川和子
1885	2023-	5	1	42	北海道十勝郡浦幌町相川	2022. 9. 12 荒川和子
オオモンシロチョウ (♂) <i>Pieris brassicae</i> (LINNAEUS, 1758)						
1886	2023-	6	1	50	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 5. 9 荒川和子
オオモンシロチョウ (♀) <i>Pieris brassicae</i> (LINNAEUS, 1758)						
1887	2023-	7	1	59	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 5 荒川和子
1888	2023-	8	1	58	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 9 荒川和子
1889	2023-	9	1	55	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 25 荒川和子
モンキチョウ <i>Colias erate</i> (ESPER, 1805)						
1890	2023-	10	2	40~45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 5. 21 荒川和子
1891	2023-	11	1	49	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022. 9. 4 荒川和子
1892	2023-	12	1	50	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022. 9. 8 荒川和子
1893	2023-	13	1	49	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2022. 9. 8 荒川和子
エゾシロチョウ <i>Apoeia crataegi</i> (LINNAEUS, 1758)						
1894	2023-	14	6	57~70	北海道十勝郡浦幌町北町	2022. 6. 17 荒川和子
1895	2023-	15	1	71	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 6. 29 荒川和子
エゾスジグロシロチョウ <i>Pieris dulcinea</i> (BUTLER, 1882)						
1896	2023-	16	4	39~41	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 5. 17 荒川和子
1897	2023-	17	1	42	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 5. 21 荒川和子
1898	2023-	18	1	44	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 5. 25 荒川和子
1899	2023-	19	1	50	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 5. 25 荒川和子

1) 〒089-5617 北海道十勝郡浦幌町字南町

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
1900	2023- 20	1	50	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 6. 21	荒川和子
1901	2023- 21	2	47	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 21	荒川和子
スジグロシロチョウ	<i>Pieris melete</i>	(MÉNÉTRIÉS, 1857)				
1902	2023- 22	2	52~54	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 29	荒川和子
エゾヒメシロチョウ	<i>Leptidea morsei</i>	(FENTON, 1882)				
1903	2023- 23	2	36~37	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 5. 7	荒川和子
1904	2023- 24	3	37~39	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 5. 10	荒川和子
1905	2023- 25	1	39	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 5. 21	荒川和子
1906	2023- 26	1	35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 5. 24	荒川和子
1907	2023- 27	1	40	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 5. 25	荒川和子
1908	2023- 28	1	41	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 7. 18	荒川和子
1909	2023- 29	2	39	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022. 7. 29	荒川和子
セセリチョウ科 Hesperidae						
コチャバネセセリ	<i>Thoressa varia</i>	(MURRAY, 1875)				
1910	2023- 36	1	29	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 6. 21	荒川和子
1911	2023- 37	1	28	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 7. 4	荒川和子
オオチャバネセセリ	<i>Polytremis pellucida</i>	(MURRAY, 1875)				
1912	2023- 38	2	27~34	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 19	荒川和子
1913	2023- 39	2	31~34	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 21	荒川和子
1914	2023- 40	1	36	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 25	荒川和子
ミヤマセセリ	<i>Erynnis montanus</i>	(BREMER, 1861)				
1915	2023- 41	1	35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 5. 17	荒川和子
1916	2023- 42	1	36	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 5. 25	荒川和子
イチモンジセセリ						
1917	2023- 43	1	40	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 1	荒川和子
カラフトタカネセセリ						
1918	2023- 106	1	24	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 6. 21	荒川和子
タテハチョウ科 Nymphalidae						
ギンボシヒョウモン	<i>Speyeria aglaja</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1919	2023- 44	1	52	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 6. 15	荒川和子
1920	2023- 45	1	56	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 8. 1	荒川和子
ウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana adippe</i>	([DENIS & SCHOFFERMÜLLER], 1775)				
1921	2023- 46	1	49	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 6. 21	荒川和子
1922	2023- 47	1	49	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 7. 5	荒川和子
1923	2023- 48	1	42	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 19	荒川和子
1924	2023- 49	1	53	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 21	荒川和子
1925	2023- 50	3	58	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 7. 21	荒川和子
1926	2023- 51	2	55	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 5	荒川和子
オオウラギンスジヒョウモン	<i>Argyronome ruslana</i>	(MOTSCHULSKY, 1866)				
1927	2023- 54	1	57	北海道十勝郡浦幌町南町	2022. 9. 18	荒川和子
ミドリヒョウモン	<i>Argynnis paphia</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1928	2023- 52	1	58	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 21	荒川和子
1929	2023- 53	1	58	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 27	荒川和子
シータテハ	<i>Polygonia c-album</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1930	2023- 55	2	45~53	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 19	荒川和子
1931	2023- 56	1	50	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022. 7. 21	荒川和子
エルタテハ	<i>Nymphalis l-album</i>	(ESPER, 1780)				
1932	2023- 57	2	58~59	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022. 9. 29	荒川和子
キバリタテハ	<i>Nymphalis antiopa</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1933	2023- 58	1	57	北海道十勝郡浦幌町留真	2022. 5. 18	荒川和子

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
アカタテハ	<i>Vanessa indica</i>	(HERBST, 1794)				
1934	2023-	59	1	58	北海道十勝郡浦幌町南町	2022.9.25 荒川和子
ヒメアカタテハ	<i>Vanessa cardui</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1935	2023-	60	1	52	北海道十勝郡浦幌町南町	2022.9.18 荒川和子
1936	2023-	61	1	52	北海道十勝郡浦幌町南町	2022.9.25 荒川和子
1937	2023-	62	1	48	北海道十勝郡浦幌町南町	2022.9.30 荒川和子
コヒオドシ	<i>Aglais urticae</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1938	2023-	63	1	46	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022.7.21 荒川和子
クジャクチョウ	<i>Inachis io</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1939	2023-	64	1	49	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.4.26 荒川和子
1940	2023-	65	2	53~56	北海道十勝郡浦幌町南町	2022.7.21 荒川和子
1941	2023-	66	1	56	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2022.9.4 荒川和子
1942	2023-	67	1	58	北海道十勝郡浦幌町南町	2022.9.15 荒川和子
アカマダラ	<i>Araschnia levana</i>	(LINNAEUS, 1758)				
1943	2023-	71	1	31	北海道十勝郡浦幌町万年	2022.5.10 荒川和子
1944	2023-	72	2	26~28	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.5.17 荒川和子
1945	2023-	73	1	30	北海道十勝郡浦幌町留真	2022.5.18 荒川和子
サカハチチョウ	<i>Araschnia burejana</i>	BREMER, 1861				
1946	2023-	74	1	37	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.29 荒川和子
フタスジチョウ	<i>Neptis rivularis</i>	(SCOPOLI, 1763)				
1947	2023-	68	1	41	北海道十勝郡浦幌町万年	2022.6.21 荒川和子
1948	2023-	69	2	40~43	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.3 荒川和子
1949	2023-	70	1	43	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.21 荒川和子
コムラサキ	<i>Apatura metis</i>	FREYER, 1829				
1950	2023-	75	2	60	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022.7.21 荒川和子
1951	2023-	76	1	56	北海道十勝郡浦幌町南町	2022.7.25 荒川和子
1952	2023-	77	1	60	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.26 荒川和子
1953	2023-	78	1	65	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.27 荒川和子
1954	2023-	79	1	62	北海道十勝郡浦幌町南町	2022.7.27 荒川和子
ヤマキマダラヒカゲ	<i>Neope nipponica</i>	BUTIER, 1881				
1955	2023-	80	1	53	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.5.25 荒川和子
1956	2023-	81	1	61	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.6.7 荒川和子
1957	2023-	82	1	59	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.6.15 荒川和子
1958	2023-	83	1	56	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.6.21 荒川和子
1959	2023-	84	2	56~60	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.19 荒川和子
シロオビヒメヒカゲ	<i>Coenonympha hero</i>	(LINNAEUS, 1761)				
1960	2023-	85	3	31~34	北海道十勝郡浦幌町万年	2022.6.7 荒川和子
1961	2023-	86	1	32	北海道十勝郡浦幌町北町	2022.6.17 荒川和子
クロヒカゲ	<i>Lethe diana</i>	(BUTLER, 1866)				
1962	2023-	87	1	43	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.6.21 荒川和子
1963	2023-	88	1	41	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.17 荒川和子
1964	2023-	89	1	41	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.19 荒川和子
ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>	BUTLER, 1866				
1965	2023-	90	1	35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.6.21 荒川和子
1966	2023-	91	2	35~37	北海道十勝郡浦幌町万年	2022.6.21 荒川和子
1967	2023-	92	1	35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.3 荒川和子
ウラジャノメ	<i>Lopinga achine</i>	(SCOPOLI, 1763)				
1968	2023-	93	1	49	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022.7.21 荒川和子
ジャノメチョウ	<i>Minois dryas</i>	(SCOPOLI, 1763)				
1969	2023-	94	2	47~55	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022.7.21 荒川和子

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
1970	2023- 95	1	50	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 26	荒川和子
1971	2023- 96	1	49	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 29	荒川和子
1972	2023- 97	1	49	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 8. 20	荒川和子
シジミチョウ科 Lycaenidae						
コツバメ	<i>Callophrys ferrea</i>		(BUTLER, 1866)			
1973	2023- 98	1	23	北海道十勝郡浦幌町万年	2022. 5. 10	荒川和子
ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas</i>		(LINNAEUS, 1761)			
1974	2023- 105	1	30	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 6. 21	荒川和子
ツバメシジミ	<i>Everes argiades</i>		(PALLAS, 1771)			
1975	2023- 99	1	24	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 6. 7	荒川和子
1976	2023-100	2	25~27	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022. 7. 21	荒川和子
1977	2023-101	1	24	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2022. 7. 29	荒川和子
1978	2023-102	1	26	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 8. 17	荒川和子
ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus</i>		(LINNAEUS, 1758)			
1979	2023-103	1	25	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 6. 21	荒川和子
1980	2023-104	1	27	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2022. 7. 21	荒川和子

参 考 文 献

- 志村 隆. 2007. 日本産蝶類標準図鑑. 336pp. 学習研究社, 東京.
- 堀 繁久・桜井正俊. 2015. 昆虫図鑑北海道の蝶と蛾. 422pp. 北海道新聞社, 札幌.
- 永盛俊行・永盛拓行・芝田 翼・黒田 哲・石黒 誠. 2018. 完本 北海道蝶類図鑑. 396pp.
- 永盛俊行・芝田 翼・辻 規男・石黒 誠. 2020. 北海道の蝶. 414pp.





エゾスジグロシロチョウ



スジグロシロチョウ



エゾヒメシロチョウ



コチャバネセセリ



オオチャバネセセリ



ミヤマセセリ



イチモンジセセリ



カラフトタカネキマダラセセリ









ルリシジミ

帯広空港敷地内の十勝坊主（アースハンモック）のトビムシ類

須摩靖彦¹⁾

Yasuhiko SUMA: Collembola fauna of Tokati-bouzu (Earth hummocks) in Obihiro-airport

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 23: 11-18.

はじめに

十勝坊主（アースハンモック）は地衣類・シダ植物や種子植物の葡萄矮性灌木などに覆われた、直径が数十cm～2m余、高さ数十cmの半球状のドーム型の高まりで、また土の塚（土饅頭）で、それが連続的に一面に分布する。周水河環境下で形成された構造土の一種で、高山帯やツンドラ気候から冷温帯まで広く分布する（田村，2006；小疇，2019；小疇ら，2020）。北海道では十勝地方が一番多く分布し、その他宗谷地方や根室半島でも確認されている（天井澤，1997）。なお、帯広畜産大学敷地内の「帯広畜産大学農場の構造土十勝坊主」は北海道の天然記念物に、更別村の「勢雄学術自然保護地区」は北海道の学術保護区にそれぞれ学術的価値が高い事から指定されている（十勝の自然史研究会，1983）。

十勝坊主（アースハンモック、以下十勝坊主で表す）内の土壤動物の研究は、ササラダニ相について帯広空港敷地内、幕別や当縁の3地域の十勝坊主から30数種

を報告している。その種は比較的原始的なササラダニが多く生息し、これはその場所の自然度を表すものと述べている（大西，2018）。なお、十勝坊主のトビムシ相の報告はこれまでなく、今回が初めてである。

トビムシは体長1～2mm（まれに0.3～1mmや、反対に大きいもので4mm超え）で、体形は細長いものやイモムシ型が多い。体色は灰色から黒色と目立たないものが多く、体表面はウロコや長短の毛で覆われる。地表性・樹上性の種は体表面にウロコと長毛が良く発達し、地中性・半地中性のトビムシはウロコなく短毛が体表面に疎らに分布する。頭部は独立するが胸部の体節（3節）と腹部の体節（6節以内）に区別なく連続する。胸部腹面に肢が3対あるが、その背面に翅がないことが分類的に昆虫綱（外顎綱）グループから少しはなれ、カマアシムシ目・コムシ目と共に内顎綱グループを形成する。なお、外顎綱と内顎綱をあわせて、節足動物門内の六脚亜門を作る。トビムシの名のように、腹部第4節腹面にある跳躍器で激しく跳ねるが、跳躍器のない地中性トビムシも多数存在する。トビムシ類は腹部第1節腹面に腹管（粘管）があるのが唯一の共通点で、その機能は他物に付着して体の安定を図ることや、体液調節の機能を持つ（青木編著，2015）。

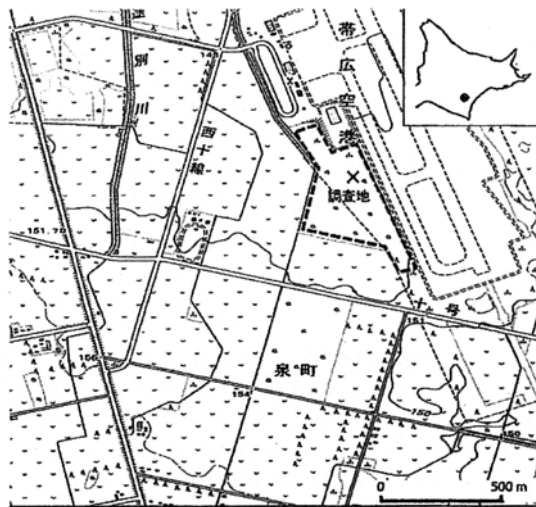


図1 帯広市泉町の調査地×（小疇ら，2020）



写真1 調査地の十勝坊主、表面の草は刈り取ったあと（川内和博氏の提供）

1) 〒004-0041 札幌市厚別区大谷地東4丁目3-13-1303

これまで十勝地方からのトビムシは13科100種が報告されている(須摩・山崎, 2013; 須摩, 2022)。今回は帯広空港敷地内の十勝坊主の土壤動物調査で採集したトビムシ類の提供があり、それを基に報告するものである。

調査地の概要と方法

調査地は帯広市泉町帯広空港南西縁の海拔150m、面積約16haのカシワとシラカバを主とする広葉樹林(チョウセンヤマナラシが周辺から侵入している)と草地の入り組んだ未開墾地である(図1)。この広葉樹林の林床と草地に十勝坊主が一面に広がっている(写真1)。このドーム型の高まり(土の塚)の地表面には、ゼンマイ、ヨモギ、ササ、ワレモコウ、ススキ、オギなどの草本に覆われ、地表下でこれらの根茎が密にからんだマット状になっている(実際は草本植物に覆われているので、十勝坊主は見分けにくい)。

土壤サンプルの採取は「拾い取り法」で十勝坊主の底部から上に向けて、土壤層・リター層を無定量に約1~1.5リットルを紙袋(13×8×23.5cm)に採取した(青木, 1978)。2016年4月30日調査では2か所で2個の土壤サンプル(No.①②)、同年10月24日調査では3か所で3個の土壤サンプル(No.③④⑤)を採取した。

採取した5個の土壤サンプルはそれぞれツルグレン装置で2~3日掛けて土壤動物を抽出した。土壤動物は100%イソプロパノールで固定保存し、その液浸から実体顕微鏡(オリンパスSZ)を使いトビムシ類をすべて選び、2~6枚の集合プレパラートを作製した。プレパラートは全部で16枚(No.4763~4772、5133~5138)である。プレパラート縁の乾燥後、生物顕微鏡(オリンパスBH-2)でトビムシを同定し、合わせて全トビムシ個体数の算定をした。プレパラート標本は全て筆者が保管している。

なお、トビムシの分類体系や同定は、「日本産土壤動物 - 分類のための図解検索 - (第二版)」(青木編著, 2015)と、「日本昆虫目録 第1巻 無翅昆虫各目」(町田編著, 2020)を参考にした。

結果と考察

今回の5個の無定量の土壤サンプルから7科28種(sp. spp. cf. 幼体を含む)645個体のトビムシがツルグレンにより抽出された。その内同定されたのは、4

科14種239個体であった。なお、土壤サンプルNo.2はプレパラート6枚の内3枚の検鏡結果の概数である。他の土壤サンプルはすべて検鏡した実数である。土壤サンプル①は4科15種171個体、②は4科12種153個体(概数)、③は7科16種138個体、④は5科13種95個体、⑤は5科12種88個体であった。なお、sp. は科・属の未知種、spp. は複数の未知種、cf. は酷似しているが疑わしい種、幼体はその成虫の体長の半分以下の種である。巻末に全トビムシの土壤サンプル別の種と個体数を添付した(別表)。

これらから幾つかの知見が得られたので、項目に分けて考察する。

1. トビムシの科構成と種構成

今回の科は7科であり、普通10~14科構成から考えると少なかった。科構成はシロトビムシ科が320個体(全体の49.6%)で1番多く、2番目はツチトビムシ科の224個体(34.7%)である。この2科で大部分(84.3%)を占め、続いてイボトビムシ科の59個体(9.1%)、ムラサキトビムシ科の31個体(4.8%)であり、残り3科で11個体(1.7%)であった(図2)。

今回の科構成の特徴は、シロトビムシ科とツチトビムシ科で大部分を占めたこと、特にツチトビムシ科よりシロトビムシ科が多かったことが大きな特徴で、4月調査はシロトビムシ科が72.8%を占めた。また、アヤトビムシ科とマルトビムシ亜目などの地表性トビムシが少数であった。その上、地表性のトゲトビムシ科は抽出されなかった。種数はツチトビムシ科が9種、ムラサキトビムシ科とシロトビムシ科がそれぞれ6種、イボトビムシ科4種、アヤトビムシ科、ヒメマルトビムシ科、クモマルトビムシ科がそれぞれ1種であった。

今回はツチトビムシ科よりシロトビムシ科の個体数が多い、この科構成は十勝坊主構造土の特徴を表すものと言える。

種構成は、種同定の出来ないシロトビムシ亜科数種の249個体(38.6%)を除くと、ツチトビムシ科のベソッカキトビムシが190個体(29.5%)と一番多く最優占種であった。続いて、シロトビムシ科のアラツブシロトビムシ属の一種の50個体(7.8%)であであり、イボトビムシ科のチビヤマトビムシ属の幼体24個体(3.7%)であった。

今回の種構成はシロトビムシ科3~4種とベソッカキトビムシで75.8%を占めた。また全ての土壤サン

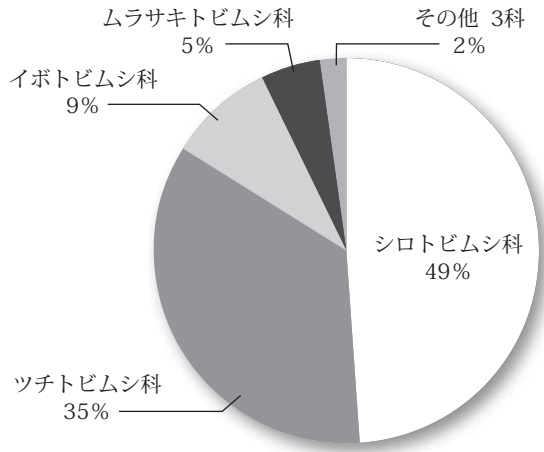


図2 十勝坊主の科構成

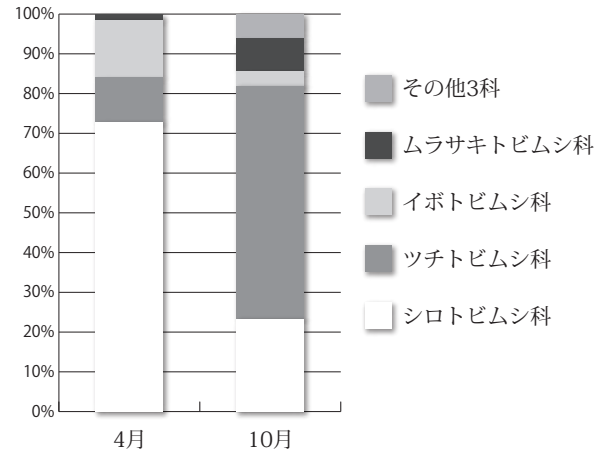


図3 4月と10月の科構成

プルからこの4～5種のトビムシが獲られ、これら中心とする種構成であった。

2. 春（4月）と秋（10月）の科構成・種構成の比較

今回の春、秋の2回の調査から、春（4月）の調査は無定量土壌サンプルが2個で、トビムシは4科17種324個体であった。秋（10月）の調査は無定量土壌サンプルが3個で、トビムシは7科24種321個体であった。2シーズンを比較すると、個体数は同じであるが4月で4科17種から、10月で7科24種と、科・種数で増加した。科構成は4月ではシロトビムシ科が72.8%を占めるが、10月調査では26.7%と減少する。反対

にツチトビムシ科は4月11.1%から10月58.6%と増加した（図3）。その他はイボトビムシ科4月多く、ムラサキトビムシ科は10月が多かった。種ではベソッカキトビムシが6.8%（春）から52.3%（秋）と増加する一方、シロトビムシ亜科の数種は58.6%（春）から18.4%（秋）に減少した。

今回の調査から春・秋の個体数は同じであるが、春から秋に科と種の増加と、個体数については春がシロトビムシ科が多く、秋はツチトビムシ科が多く占めた。これはシロトビムシ科が春に繁殖し、秋はツチトビムシ科が多く繁殖することを示している。

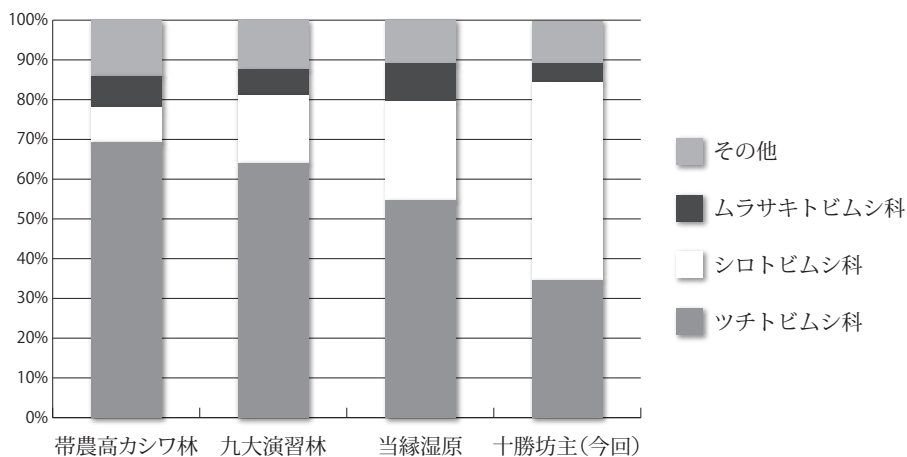


図4 過去3調査との科構成の比較

3. 過去の3調査との科・種構成の比較

これまで報告した3か所（帯広市帯広農高カシワ林のトビムシ、足寄町九大演習林のトビムシ、大樹町当縁湿原のトビムシ）の科構成を比較する（須摩，

2019. 2020. 2021）。主な3科（ツチトビムシ科、シロトビムシ科、ムラサキトビムシ科）を比較対象にする（図4）。ムラサキトビムシ科は各地ともに大きな違いはないが、ツチトビムシ科とシロトビムシ科に大

きな違いが表れている。すなわち、帯農高カシワ林ではツチトビムシ科が70%近く占めるが、九大演習林では65%近く、当縁湿原では55%近くと、3地点では55~70%の過半数以上を占めている。しかし、十勝坊主ではツチトビムシ科が35%近くであり、反対にシロトビムシ科が50%近くを占め個体数が逆転している。

この様に、十勝坊主の科構成にその特徴が表れている。この相違は植生のカシワ林、ミズナラ林等の広葉

樹林より十勝坊主は湿原環境に近い環境の表れたと思われる。

次に種構成を比較すると、十勝坊主で最優占種であるベソッカキトビムシは、九大演習林でも最優占種であった(表1)。当縁湿原では3番目の優占種であるが、帯農高カシワ林では全く現れなかった。ここでも九大演習林、当縁湿原とは近いが、科構成と同様に帯農高カシワ林との違いが表れている。

表1. 過去3調査との優占種の比較

	帯農高カシワ林	九大演習林	当縁湿原	十勝坊主 (今回)
最優占種	コサヤツメトビムシ	ベソッカキトビムシ	ハイイロツチトビムシ	ベソッカキトビムシ
優占種 (5%以上)	ハイイロツチトビムシ ヤツメシロトビムシ	アオジロツチトビムシ シロツチトビムシ	ニッポンシロトビムシ ベソッカキトビムシ ヒサゴトビムシ ヤマトメナシツチトビムシ	アラツブシロトビムシ属の一種
個体数	1,316	457	909	645
種数	39	35	27	28

4. 特徴ある種 (メナシフォルソムトビムシに酷似種)

腹部第4-6節が完全に融合し、跳躍器端節が2歯であるフォルソムトビムシ属 *Folsomia* はツチトビムシ科 Isotomidae の中で種数・個体数と共に大きな属で、日本から14種が記載されている。その内、眼のない種が8種で、他の6種は1+1~4+4個の眼がある。今回の特徴ある種 (メナシフォルソムトビムシに酷似種) は眼の無い種である。記載種で眼がない8種のうち、跳躍器柄節の前面に2+2の毛を持つ種はメナシフォルソムトビムシ *Folsomia inoculate* Stach, 1947 とエゾフォルソムトビムシ *Folsomia ezoensis* Yosii, 1965 の2種がある (青木, 2015)。この記載2種と今回の酷似種を比較検討する (表2)。

今回の酷似種は体長が0.9~1.3mm、体色は白で、体表は滑らかで、短毛と各節4-6本の直毛で覆われる (写真2)。体形は円筒状で、各節の境界は明瞭であるが、腹部第4-6節は融合する。触角4節の比はI:II:III:IV = 10:17:15:28である。大顎の先端部に4歯あり、基部に臼歯部がある (写真3)。小顎の先端部は数本に枝分かれた突起を持つ。跳躍器端節は2歯である。眼がなく白体色、円筒形であることから、主に土壌間隙の生活であると思われる。記載種2種と共通なのは眼が

なく、跳躍器柄節の前面に2+2の毛を持つことである。それに対して、記載種2種と違う点は、PAOが細長く三日月型で、触角第1節横幅の1.5倍である (写真4)。また、跳躍器は細長く、折りたたむとその先端は腹部第2節中央に達する (写真5)。跳躍器の3節の比は、柄節:茎節:端節 = 13:21:2で、記載種2種と比べて柄節より茎節がはるかに長い。その上、茎節後面に沢山の横皺がある。柄節前面の毛は2+2で3種共通であるが、茎節前面の毛は20~24本と既存2種よりも2倍近く多い。これらから記載2種とは別種と思われるので、新種あるいは日本未記録種の両面から調査を継続する。今回はメナシフォルソムトビムシの酷似種 *Folsomia* cf. *inoculate* Stach, 1947 として報告する。

今回の酷似種は、2016年4月30日調査で5個体、同年10月24日調査で3個体の計8個体が抽出された (プレパレートNo.1763-4766, 5135, 5138, 5139)。

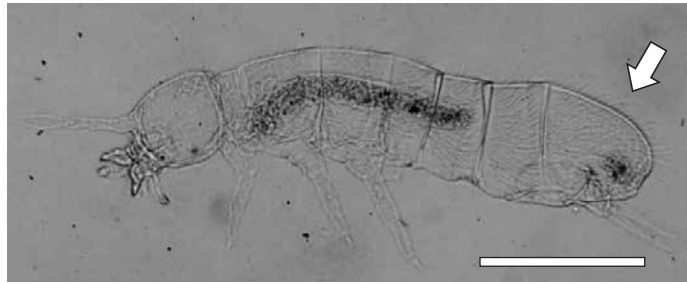


写真2 今回のメナシフォルソムトビムシに酷似種(融合する腹部第4~6節◁、スケール0.4mm)



写真3 大顎(下)、↑は臼歯部、小顎(上)

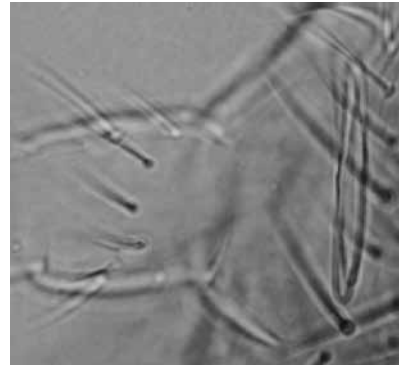


写真4 PAO(右)と触角第1節(左)

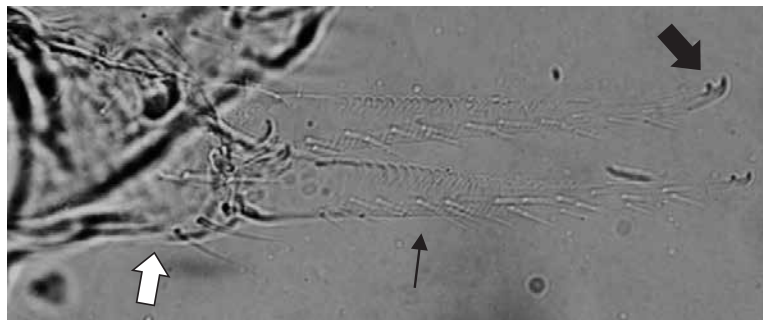


写真5 跳躍器(柄節◁、茎節↑、端節(2歯)◀)

表2 記載2種と酷似種の形質比較

種名 体長	PAO	ant.1の横幅 : PAOの長さ	腹部4~6節に 棍棒状感覚毛	跳躍器の長さ	跳躍器 3節の比	茎節前面の 毛数
メナシフォルソムトビムシ 1.2mm	細長い楕円形 くびれなし	ant.1の横幅 よりやや長い	あり	腹部第2節に 届かない	4:3.6:1	8~12
エゾフォルソムトビムシ 1.3mm	細長い楕円形 くびれあり	ほぼ同じ	なし	同上	20:15:4	10
今回の酷似種 0.9~1.3mm	細長い三日月 型、くびれなし	PAO長くant.1 の1.5倍	なし	腹部第2節中央 に達する	13:21:2	20~24

要約

1. 5個の無定量土壌サンプルより7科28種 (sp. spp. cf. 幼体を含む) 645個体がツルグレンにより抽出された。その内同定されたのは、4科14種239個体であった。

2. 構成する科は7科であり、普通10~14科構成から考えると少なかった。その上、十勝坊主土壌サンプルの特徴は、ツチトビムシ科よりシロトビムシ科の個体数が多いことであった。ツチトビムシ科のベソッカキトビムシが190個体 (29.5%) と一番多く最優占種であった。

3. 科構成は4月ではシロトビムシ科が72.8%を占めるが、10月調査では26.7%と減少する。反対にツチトビムシ科は4月11.1%から10月58.6%と増加した。
4. 過去調査の3地点ではツチトビムシ科が55~70%の過半数以上を占めているが、十勝坊主ではツチトビムシ科が35%近くであり、反対にシロトビムシ科が50%近くを占め個体数が逆転している。九大演習林の最優占種がベソッカキトビムシであることから、十勝坊主のトビムシ相は当縁湿原、九大演習林に近いが、反対に帯農高カシワ林との違いが表れている。
5. 今回のメナシフォルソムトビムシの酷似種はPAOが細く三日月型で、触角第1節横幅の1.5倍。跳躍器は細長く、その先端は腹部第2節中央に達する。柄節より茎節がはるかに長く、茎節前面の毛は20~24本であり、その後面には多数の皺がある。このことから記載2種とは別種と考える。

謝 辞

今回の調査は、北海道十勝管内更別村の大西純氏が帯広空港南西縁調査地から試料採集とツルグレン抽出を実施したもので、筆者はその土壌サンプルからトビムシの提供を受けたものである。また、まとめるに当たり適切なアドバイスをいただき、大西純氏にこの紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

十勝坊主（アースハンモック）の環境景観の写真は十勝自然保護協会の川内和博氏の提供を頂いた。感謝申し上げます。

参考文献

- 青木淳一. 1978. 打ち込み法と拾い取り法による富士山麓青木ヶ原のササラダニ群集調査. 横浜国大紀要, 4 (1) : 149-154.
- 青木淳一編著. 2015. 日本産土壌動物—分類のための図解検索—(第二版). 1969pp. 東海大学出版部. 神奈川.
- 小嶋 尚. 2019. 北海道十勝地方のアースハンモック. 地学クラブ308回講演会報告資料 : 1-2.
- 小嶋 尚・清水長正・澤田結基・川内和博. 2020. 帯広市泉町のアースハンモック(十勝坊主). 帯広百年記念館紀要, 38 : 25-33.

- 町田龍一郎編著. 2020. 日本昆虫目録 第1巻 無翅昆虫各目. i-xxvi+106pp. 権歌書房. 東京.
- 大西 純. 2018. ササラダニに魅せられて(その9, 十勝坊主に棲むササラダニ類). 十勝自然保護協会ニース, 155 : 11.
- 須摩靖彦. 2020. 帯広農高カシワ天然林のトビムシ類. 浦幌町立博物館紀要, 20: 9-14.
- 須摩靖彦. 2021. 大樹町当縁湿原と海岸のトビムシ. 浦幌町立博物館紀要, 21: 9-15.
- 須摩靖彦. 2022. 足寄町九州大学北海道演習林のトビムシ類. 浦幌町立博物館紀要, 22: 13-20.
- 須摩靖彦・山崎穂菜美. 2013. ライトトラップで採集された北海道未記録のタテジマアヤトビムシ. *Jezoensis*, 39: 94-100.
- 田村昇市. 2006. 新「十勝坊主」群落の発見. ペドロジスト, 50 (1) : 47-50.
- 天井澤暁裕. 1997. 根室半島におけるアースハンモックの形成環境と分布形態. 国土館大学地理学報告, 6 : 27-33.
- 十勝の自然史研究会. 1983. 十勝の自然を歩く. 269pp. 北海道大学図書刊行会. 札幌.

別表. 十勝坊主のトビムシの種とその個体数

No.	学名	調査日 和名↓ 土壌サンプルNo.→	2016/ 4/30		2016/10/24			科合計↓	
			1	※2	3	4	5	合計	%↓
	Hypogastruridae	ムラサキトビムシ科							31
1	<i>Willemia japonica</i> Yosii, 1970	ヤマトヒメシロトビムシ			1			1	4.8%
2	<i>Xenylla brevispina</i> Kinoshita, 1916	キノボリヒラタトビムシ			1			1	
3	<i>Schaefferia decemocolata</i> (Stach, 1939)	マダラムラサキトビムシ		1	2	1		4	
4	<i>Ceratophysella wrayia</i> (Uchida & Tamura, 1968)	コオニムラサキトビムシ				1		1	
5	<i>Ceratophysella denisana</i> Yosii, 1956	カッシュクヒメトビムシ			8	2		10	
6	<i>Ceratophysella</i> spp.	フクロムラサキトビムシ属の数種	2	2	5	5		14	
	Onychiuridae	シロトビムシ科							320
7	<i>Hymenaphorura</i> sp.	アラツブシロトビムシ属の一種	10	22	4	4	10	50	49.6%
8	<i>Protaphorura nutak</i> (Yosii, 1972)	ボロシリシロトビムシ		1			2	3	
9	<i>Orthonychiurus</i> sp.	トゲナシシロトビムシ属の一種				4		4	
10	<i>Paronychiurus japonicus</i> (Yosii, 1967)	ニッポンシロトビムシ	3	4			1	8	
11	Onychiurinae spp.	シロトビムシ亜科の数種 (含幼体)	103	87	26	28	5	249	
12	<i>Mesaphorura</i> sp.	イトシロトビムシ属の一種	4	2				6	
	Neanuridae	イボトビムシ科							59
	Frieseinae	シリトゲトビムシ亜科							9.1%
13	<i>Feisea (Friesea) cf. japonica</i> Yosii, 1954	ヤマトシリトゲトビムシに酷似種	3	6				9	
	Pseudachorutinae	ヤマトビムシ亜科							
14	<i>Pseudachorutes isawaensis</i> Tamura, 2001	イサワヤマトビムシ	2					2	
15	<i>Micranurida pygmaea</i> Börner, 1901	チビヤマトビムシ			2			2	
	larvae of <i>Micranurida</i> sp.	チビヤマトビムシ属の一種 (幼体)	11	13				24	
	Neanurinae	イボトビムシ亜科							
16	Neanurinae spp.	イボトビムシ亜科の数種	8	4	1	3	6	22	
	Isotomidae	ツチトビムシ科							224
17	<i>Anurophorus laricis</i> Nocolet, 1842	ナガツチトビムシ	5				1	6	34.7%
18	<i>Pseudanurophorus binoculatus</i> Kseneman, 1934	ミヤマツチトビムシ			1			1	
19	<i>Folsomia cf. inoculata</i> Stach, 1947	メナシフォルソムトビムシに酷似種	5			1	2	8	
20	<i>Folsomia ocutocolata</i> Handschin, 1925	ベソッカキトビムシ	12	10	76	38	54	190	
21	<i>Folsomides pusillus</i> (Schäffer, 1900)	コドウナガツチトビムシ	1	1	1			3	
22	<i>Pteronychella cf. spatiosa</i> Uchida et Tamura, 1968	コサヤツメトビムシに酷似種				4	1	5	
23	larvae of <i>Desoria notabilis</i> (Schäffer, 1896)	アオジロツチトビムシの幼体	1					1	
24	<i>Desoria trispinata</i> (MacGillivray, 1896)	ミツハツチトビムシ			4	3		7	
25	Isotomidae sp.	ツチトビムシ科の一種	1				2	3	
	Entomobryidae	アヤトビムシ科							3
26	<i>Entomobrya</i> sp.	アヤトビムシ属の一種			3			3	
	Katiannidea	ヒメマルトビムシ科							4
27	<i>Sminthurinus</i> sp.	ヒメマルトビムシ属の一種			1	1	2	4	
	Dicyrtomidae	クモマルトビムシ科							4
28	<i>Ptenothrix</i> sp.	ニシキマルトビムシ属の一種			2		2	4	
		個体数	171	153	138	95	88	645	
		種数	15	12	16	13	12	28	
		土壌サンプルNo.	1	※2	3	4	5		

数種 (spp.) は1種として数えた. ※は概数である.

調査記録

座談会記録「お正月の文化」

持田誠¹⁾・古賀詠風²⁾

Makoto Mochida and Eifu Koga, 2023. A Roundtable talk of the New year culture.

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 23: 19-46.

摘 要

浦幌町立博物館では、2022年1月8日から23日まで、トピック展「お正月の文化」を開催した。また、併せてこの年より、民俗調査として「元旦に食べたもの」の写真募集を行なっている。これらは、伝統的な正月文化を知る世代の記憶を伝えるとともに、21世紀も20年以上を過ぎた昨今、正月の過ごし方がどのように変化してきているかを把握することが目的である。

明治以後の本州からの入植者が拠点を形成していく北海道特有の近現代史においては、それまでのアイヌ民族による先住民文化とは異なる本州の文化を、入植地ごとに展開し、同じ北海道という地域内において、さまざまな文化圏が混在した、独自の「北海道文化」を形成した。こうした近現代の北海道文化の記録については、1982年以降、北海道みんぞく文化研究会によって道内各地の聞き取り調査結果をまとめた「北海道を探る」シリーズ（1982-96）や、北海道が刊行した『北の生活文庫』（1995-2000）など、代表的な概説報告がある。

一方で、核家族化や労働環境などの生活様式の変化、個人商店の廃業と大型量販店やコンビニエンスストアの出現による買い物環境の変化などにより、食をはじめとする正月文化にも、時代による変化が起きていることも推察される。特に正月の料理については、雑煮、おせち料理など、外観的には伝統的な文化が引き継がれているように思われるが、詳細に見ていくと現状は多様化している可能性が高い。こうした現代の正月料理の実態に関する調査としては、日本調理学会による特別研究「行事食・儀礼食」にもとづく広島県での比

較研究である高橋ら（2016）の報告や、家族構成による正月料理の喫食状況を調査した鷺見（2013）による報告、最近では2013-14年にかけて調査された宮崎早花ほか（2022）の報告がある（註1）。

こうした風俗の各地域における具体的な記録化は、変化の早い現代社会において重要な課題であると考えられることから、当館では、浦幌町における正月文化の今昔を記録することを目的に、トピック展「お正月の文化」の開催期間中に、座談会「お正月の文化を語ろう」を開催した。話題提供者として、古賀が小学生時代に自由研究として実施した「おせち料理研究」と、自ら祖母の思い出に基づいて「おせち料理」を製作した際の記録動画（いずれもトピック展「お正月の文化」で展示）に関する経験談等を紹介した。続いて6名の浦幌町民に、自らの経験する料理をはじめとした正月文化について、自由に語り合ってもらった。

本稿では、2022年現在の浦幌町民の語る正月文化に関する認識を記録することを主眼とした。このため、座談会の結果を受けた詳細な考察や比較研究は実施していないが、座談会で出た発言に関する文献調査を実施し、註に情報として掲載した。

座談会記録の文字化は、北海道大学生協同組合印刷・情報サービスに委託し、長瀬忍氏に尽力いただいた。文献調査には帯広市図書館、釧路市中央図書館の協力を得た。また、古賀のおせち料理製作の母体を形成された古賀絢子氏をはじめ、古賀家の方々には個人情報を含む貴重な情報を提供いただいた。座談会出席者にも、記録の公表に同意いただいた。関係された皆様に対して謹んで謝意を表する。

1) 浦幌町立博物館 〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町16-1

2) 十勝うらほろ楽舎 〒089-5611 北海道十勝郡浦幌町寿町7-1

座談会「お正月の文化を語ろう」

【実施日】2022年1月13日

【場 所】浦幌町立博物館

【参加者】

- ・山本ひとみ 1956（昭和31）年、浦幌町出身。
- ・飯井紹一 1960（昭和41）年、浦幌町出身。
真宗大谷派謙敬寺住職。
- ・大本眞里子 1949（昭和24）年、埼玉県草加市出身。同越谷市を経て1982（昭和57）年から浦幌町居住。
- ・久我ヒサエ 1945（昭和20）年、豊頃町茂岩出身。
1961（昭和36）年から浦幌町居住。
- ・円子紳一 1951（昭和26）年、白糠郡音別村尺別炭鉱出身。閉山後の浦幌炭鉱を経て浦幌市街地へ居住。
- ・関谷 晃 1958（昭和33）年、阿寒郡阿寒町雄別炭鉱出身。大学卒業後、1982（昭和57）年浦幌町役場勤務。
- ・（話題提供）古賀詠風 1996（平成8）年 遠軽町出身。浦幌町役場が採用する地域おこし協力隊員として2019（平成31）年より浦幌町居住。
- ・（進行）持田 誠 1973（昭和48）年 神奈川県横浜市出身。2015（平成27）年から浦幌町立博物館学芸員として浦幌町居住。

1. 小学生の自由研究「おせち料理」とおせち製作動画を観て

（持田）今日は1月13日なので、お正月的には、お正月っていつまでなのかちょっと私もよく分からないんですけど、1月10日ぐらいまでがだいたい多いですかね。鏡開きとかって。なんですけど、うちはまだお正月の真っ最中でして、〔トピック展〕「お正月の文化展」をやっています（図1）。



図1 トピック展「お正月の文化展」。浦幌町立博物館

これは、これから毎年やろうと思っていて、年末に「クリスマスの文化展」をやって、年明けに「お正月の文化展」という形で、これから少しずつやっていこうかなと思っています。

今日は、講座というよりも「お正月の文化展」の関連事業で、座談会をしようかなと。今、そこで展示していますけど、今年から、元旦に食べたものの調査というのをやっています。お正月というと、日本独特の文化習慣があって、元旦とか、場合によっては大みそかの夜から、いつもとは違うものを食べる習慣が長年あるんですけれども、やっぱり21世紀、20年もたつと、必ずしもそういう伝統的なお正月を過ごしている人ばかりではないので、今現在の日本人がどういうふうにお正月を過ごしているかというのを知る一環として、そういうのをやっています（註1）。

今日は、それもあって、お正月の様子、おそらく私ぐらいでさえ子供のころのお正月とだいぶ違ってきているので、皆さんもいろいろ若いころとか子供のころのお正月と最近のお正月と見てきて、いろいろ違いとかもあると思いますし、今日これからお話ししてもらいますけど、お正月の料理とかも昔は一生懸命こんなものを作ったけど、最近はセイコーマートで買って済ますとか、いろいろなパターンがあると思うんですよね。

なので、お正月の昔と今の違いとか、いろいろ感じていることがあれば自由にお話しただいて、お正月ってどんなものだったかなというのを振り返るような機会にできればなと思っています。講師というよりも、展示の制作に無理をお願いして、かなり無理をお願いして協力をいただいた、地域おこし協力隊（註2）の古賀詠風さんです。じゃあ、自己紹介してもらえますか。

（古賀）このままで、人数少ないので、このままでいかせてもらいます。浦幌町地域おこし協力隊の古賀詠風（えいふう）といいます。はじめまして、でしょうかね。普段は、元のフタバ薬局さん。それこそ、〔当時開催中だった企画展「いろいろな看板展」を指さして〕そこに看板があるフタバ薬局さんというところで活動していました、教育とまちづくりの取り組みのうらほろス

タイトルという活動の中にかかわっています（註3）。今年、浦幌に来てから3年目で、2年前の4月から浦幌に来て、そこから今を迎えているという感じです。

この辺も、話すときにもちょっと地元のこととかも話すんですけど、地元が北海道の遠軽町というオホーツクの町で、高校卒業までずっといて、大学だけ札幌で、今はここで過ごしているという感じです。僕で大丈夫ですか？という話を何度もして、今はちょっとハードルを下げてくれていたんですけど。

僕も皆さんのお正月の話聞いてみたいですし、祖母の関係もあって、いろいろ正月とか料理とかを調べてみたいと思ったりで、こうやって、つくったのもあったので、皆さんの世代のお正月のこととか、その辺のお話をいろいろお聞きできたらうれしいと思っています。よろしくお願いします。

(持田) それで、いきなりお正月の話をしちゃっていいっても、なかなか話しぶらいいので、とっかかりの話題提供で、古賀さんの方から…皆さんこれ見ました？（図2）これは、私は古賀君本人もすごいなと思いますけど、これをとっておいたお母さんもすごいなと（笑）。〔古賀さんの卒業した小学校は〕遠軽南小学校（註4）ですよ。学校に通っているときに調べたものなんだそうです。ここにも書きましたけど、お正月って地域によって、まずいろいろな風習が違うのと、特に北海道は入植先がばらばらだったりもしますし、現代社会はもうそういうのも関係なく人の動きが盛んなので、家ごとにはばらばらですよ。

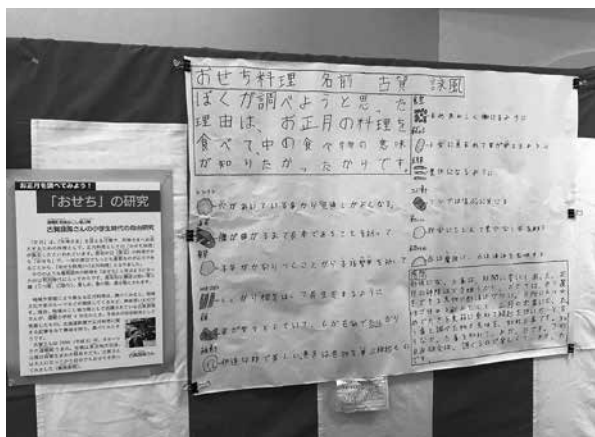


図2 小学校4年生の頃の自由研究「おせち料理の研究」（古賀詠風提供資料、浦幌町立博物館に寄託）

なので、お正月はいろいろなテーマで調べるといろいろ面白いんですよ。自由研究のテーマにはしやすいなと思っていたんですが、やっている人がこんな身近にいたなという。ちょっと古賀君の方から、どういう経緯でこういうのを調べようと思ったのかとか、どういうふうに調べたのかとか、そのあたりのお話を最初にちょっとご紹介いただいて。彼がさらにすごいのは、大人になってから自分で実際に作っているんですよ。その辺の大変だったこととか、楽しかったこととかもお話いただければなと思っています。ざっくばらんで結構ですので。これ、どういうきっかけで、まずこれを…。

(古賀) これ自体が小学校4年生なので。僕は今25歳で15年前なので、当時の鮮明な記憶とかではもちろんないんですけど、結構、食べ物自由研究とかをたくさん、後で見返してみたら、していた人で。ほかにも七草がゆとか七草の研究なんかを別の学年のときにやっていたりとかして。今もですけど、ただ食べるだけじゃなくて、結構そういう背景のあるものが気になっているところがある。

実家とか祖父母の家で、実はおせちが出てきたことはなくて。お正月料理が小皿とかでいくつか出てきていて、そういうのを見ている中で、お正月料理とかおせちというものが気になって調べていたというような感じですね。当時、これを掘り出したときじゃなかったんですけど、新聞の確か切り抜きとかで。

(持田) 何か道新（註5）にあったんですか。

(古賀) はい。あと近くに図書館もあったので、そういうところへ行きながら、どういった意味があるのかとかいうのをいろいろ調べていましたというのが、上の自由研究ですね。本当に自由にやっていたらどうなるかなというのを。僕今でも教育にかかわる仕事をしているので、やらされている宿題というよりは、本当に気になってやっていたらどうなるかなという話を、昨日僕の同僚の人としていて。これを見る限り楽しんでやっていたらどうなるかなという感じに思いました。そこから、もうおせちを作ったところで大丈夫ですか。

(持田) はい。

(古賀) おせちを作ったんですけど、さっき話した祖



図3 左が古賀の祖母、古賀絢子さん（1943-2022）。註6参照。（2019年9月、遠軽町の「グループホームありがとう」にて撮影）

母（図3）（註6）が最初はきっかけで。若干、話がずれちゃうんですけど、祖母が認知症になったんです。難病の前頭側頭型認知症というのになって、話せなくなって。徐々になっていったんですけど、そんな祖母のルーツというのを、祖父も、私の父、祖母の息子ですね、も姉妹とかも誰も知らないというのが発覚して。でも、発覚したころにはしゃべれなくなっていたので、そのルーツをたどれないかなというので、実はこのおせちを作っていた時期に並行して、僕、今、家系図を作るというのをやっているんですよ。

祖母がどういう経緯で、祖母の先祖も含めて遠軽の地元に来ているのかなとか、それまでどういう人とかかかっていたのかなとか、ちょっとそのあたりを知りたいなというところがあって、そういったのも、今もまだ完成していなくて、ライフワーク的にやっているんですけども、その中でいろいろ思い出とかを振り返っているときに、ちょうど正月の時期になって、そういえば作ってくれていたなというところで、昔、自由研究したぞと思い出して連絡したら、まさかこんな状態で15年前のものが出てきて。

これは、当時、祖母が黒豆をよく作ってくれていて、僕も正月料理で大好きだったんですけど、なら、祖母の味で覚えているものは、その味を再現してみたいなみたいなのところから、じゃあ、一緒におせちを作ってみようかみたいなのところで、作ることになりました。実はこれ、写真で、一番最後の動画で出ているところで表示されているんですけど、自由研究で調べてい

た上の食材たちは全部登場させたいなというので、一応、これが写真なんですけど（図4）。

（持田） そうか。写真、そういえばパネル作ってなかったな。写真、貼っておきますね。

（古賀） レンコン、エビ、サトイモとか、ここに書いてあるものは全部作りたいなと思ってやったというような感じですね。かまぼこだけ、さすがに自分で作れなかったんですけど、あとは浦幌産のコンブを使ったりだと、シャケを使ったりとか。ベスト電器の方にいただいたニンジンを使ったりとか、身近のものであるものを使いながら作っていたというような感じですね。まあ、大変ですね。皆さんもですし、私の祖母もこんなに作っていたんだというのが正直な感想で、3日間ぐらいかかってしまっ

それは調理時間ももちろんなんですけど、長く漬けておこなきゃいけないものとか、下処理に時間がかかるものとか、そういうものもあるんで、そういったのも入れてほしい3日間ぐらいかかって作っていました。当時は食べる側だったので、しかも自炊とかもしてなかったんで、おいしいなという感じだったんですけど、あらためて相当手間がかかって、こんなに手間がかかるのをやっていたんだということを実感した機会でした。その分、孫を当時祖母はめんこがってくれていたのかなというところも思いながら、作っていたというような感じ



図4 古賀が製作したおせち料理。料理を作る過程を動画撮影しショートムービーとしてトピック展「お正月の文化」で常時公開するとともに、座談会「お正月の文化を語ろう」も動画を眺めながら実施した。

(持田) 基本的には、おばあさんが作ってくれていたやつを再現していると考えていいですか。

(古賀) そうですね。煮物とか黒豆とかその辺。くりきんとんもかな。とかは、結構、味をまねしたいなと思って、母に味付けはどんな感じだったかなとかいうのを聞いて。黒豆だったら、うちの祖母はあえてかちかちに堅く煮るんですけど。普通、ふっくらさせるんですかね？柔らかくふっくらさせるんですけど、食感が好きだというので、しわしわになってかちかちの甘い黒豆が好きなんですけど。

(大本) 2種類あるらしいです。しわしわにする煮方と。その地域によってね。

(古賀) 僕の祖母はそっちの、かちかちの。

(大本) うちの母もしわしわでしたよ。

(古賀) しわしわでした？堅いやつ。

(大本) そんなに堅くはなかったけど、しわしわの豆でした。

(山本) しわしわにしないように作るよね。

(大本) でも、そうやってわざとしわしわにするみたい。

(山本) するんだね。

(古賀) 何かそれが恋しくなって。全部ではないですし、メニュー的に足りなかったのもあったので、自分で考えて作ったのとかもあるんで、全部が全部、祖母の味ではないですけど、作ってくれていたものは再現しようとしていました。

(持田) おばあさんがお元気だったころは、こういう形で出していたわけではない？

(古賀) そうですね。こっちの展示とかにもあったような、皿で出していたというような感じですね。

(持田) お皿に載せて。こういう品目のものは全部お皿に載けて、出していたというふうな感じだった。

(古賀) そうですね。

(持田) おじいさんはお元気ですか。

(古賀) 今、はい。そうですね。

(持田) おじいさんも、おばあさんのルーツのことはよく知らない。

(古賀) そうですね。まったく知らないみたいで、僕の父も祖父も誰も知らないという状態です。この左側にいろいろ文書でまとめているんですけど、私の父が岐阜の方のルーツというのを知ったんですけど、それも初めて知った

んですよね。家系図で調べている中で。それまではどこがルーツかというの知らなかったんですけど、たどっていくと父の、きっかけになった祖母のルーツは岐阜だったというのが発覚したり。父自身は遠軽の生まれなんですけど。父の、どこからになるのか、1910年より前ぐらいの、1900、1桁代、1905年とかぐらいのときに岐阜とかあっち方面で大災害があったぐらいの時期に、集団入植してきたの、たぶん1家族だったんだろうというような感じが、いろいろ調べている中で出てきました。

(持田) 十勝も岐阜が多いのは、やっぱり災害契機でこっちに来る人が多いですもんね。で、おばあさんは東北らしい。

(古賀) 母方が東北ですね。僕の母方が、ばあちゃんも、じいちゃんも東北で、私の父方のばあちゃんが岐阜で、じいちゃんが佐賀。

(持田) なるほど。

(古賀) 九州に古賀市ってあるんですけど、たぶんそのあたりがルーツなのかなと思いつつ。まだそこまでは至ってないんですけど、九州ルーツという。

(持田) これは、じゃあ、お母さん方のおばあさんの味をさかのぼっている。

(古賀) 父方です。父方の岐阜の方の。

(山本) そういうのをあらためて見ると面白いね。

2. おせち料理の中身

(持田) 作っていて一番大変だったのは何ですか？

(古賀) 作っていて一番大変だったもの…

(持田) 全部大変だろうね。

(古賀) 全部大変でしたね。大変だったけど、大変だったものか。うま煮というか、煮物か。煮物はこんなに、サトイモ1つむくのも、スーパーとかであるやつもあるじゃないですか。でも、じゃなくて泥付きのを買ったので、それを剥く1つで相当時間がかかってしまったりとか。飾り切りみたいなのをしたのも、それもそうですし。それも煮たり、あく抜いたりとか。

(大本) 飾り切りもしたんですか？

(古賀) ちょこっとだけです。ほんとにちょこっとだけなんです。全然、まだできてないんです。本当はコンニャクとかもリボンみたいにするのとかもあったんですけど、そこまではできずにタ

イムアップしてしまっ
(大本) でも、あれは簡単だよ。
(山本) 簡単だよ(笑)。
(古賀) そうなんですか？
(持田) 教わった方が。
(古賀) 教わりたいです。
(山本) 飾り切りより簡単だよね。
(古賀) 食材とか最後の方に入れてはいるんですけど、飾りも入れたんですけど。
(大本) うん。偉いね。
(持田) これ何？(図4)
(大本) 南天か何か。
(持田) 南天。
(古賀) そうです。南天。調べて入れてみた。それも浦幌の花屋さんとかいろいろ巡って見たんですけど、なくて。
(大本) 南天の花、売っていたでしょう。
(古賀) 僕が見たときはなかった。
(山本) たぶん、早いか遅いかどっちかだよ。
(古賀) なくて、なので、町外のスーパー見たときに、頑張って手に入れてみたいな感じです。
(山本) あれが飾り切り。あれ何？卵の…
(持田) だて巻き。
(古賀) だて巻きです。
(持田) ゆずが手に入らなかったのか。
(古賀) そうです。ゆずも手に入らなかったです。何か、今もない。
(大本) 言ってくればあったのに。
(山本) 遅い。ここに言えば、何でもそろつかもよ。
(古賀) その後、冬至の時期には、ゆず、「フクハラ」(註7)にあったんですけど、そのうち見当たらなくなっ…
(持田) 普段、置いてないからね。
(大本) あっても、ちゃんとしないのに。
(山本) する人にあげたらいい。
(持田) これから、この料理の中から少しルーツがたどれたら面白いんだろうけど、ちょっと難しいかもな。食材的には共通のものが多いもんね。基本におせち料理はやっぱり祝い肴3品とかいって、一応は何となく決まっているじゃないですか。なかなかそこからというのは難しいかもしれない。
(大本) それはもう無視して。
(山本) でも、こんなのを作っているという、親がこ

ういうふうにはちゃんと作っているというのは記憶はない。お雑煮とお煮しめとかそういう…
(大本) きんどんは練らされたし、裏ごしさせられたり。
(山本) あと、何でしたか、ダイコンとニンジンの…
(飯居) なま酢。
(山本) あれにタコが入ってて、こんな大きなたるみたいので作って。
(持田) なま酢は作らなかったの？
(古賀) なま酢はゆずの中に。切り取って、ゆずを器にして…
(山本) あとコンブだって、結んでやりませんか？た？こぶ、結んで。そしてシシャモを巻いて、こぶ巻き。そういうのを…
(持田) コンブは何か巻いたの？
(古賀) コンブはかんぴょうを巻きました。
(持田) かんぴょうを巻いたの。
(大本) かんぴょうですよ。
(持田) かんぴょうなんですか、一般的に。
(飯居) 巻くって？
(大本) こぶ巻きに。
(山本) 縛るひもじゃなくて？
(飯居) 縛るひもでしょう。
(持田) ああ、ひもね。ひもは。
(飯居) 中は？
(古賀) 中は、ニシンとあと浦幌のシャケ冷凍して余っていたので、その2つ入れてます。
(持田) 一般的には何を入れるんですか？
(山本) シシャモだったような気がする。
(持田) シシャモ。
(大本) うちにはシャケですね。
(持田) シャケ。
(飯居) うちもシャケかな。
(持田) シャケですか。
(大本) シャケの親は頭を。
(持田) 頭。
(大本) 頭をね。こぶ巻きにして。
(持田) シャケの？シャケの頭をですか？できるんですか？頭を？あのでかいのを？
(大本) できるよ。切るよ。キズのとこ、ありますよね。あそこをね。
(飯居) ここでしょう。
(大本) そうそう。
(飯居) ここ。

- (大本) 逆にしてね。
- (山本) ぶるぶる、おいしいんだよね。
- (持田) そうなんですか？
- (大本) でも、今年は、それはしなかったけど。
- (持田) 飯居さんのところもそうなんですか？
- (飯居) はい？
- (持田) 飯居さんところも？
- (飯居) こぶ巻き？
- (持田) シャケ、そうやってやる？
- (飯居) シャケか、コマイで作っていたときも…
- (持田) コマイ。山本さんのところはシシャモ。
- (山本) シシャモだったんだよね。
- (持田) それはやっぱり道東っばいですね。初めて聞きましたよ。
- (大本) そうですね。シシャモはこの辺のあれだよ。
- (持田) シャケも聞かないですよ、あまり。
- (山本) そうですか？
- (持田) ええ。だいたいニシンって聞くけどな。
- (大本) ニシンもするけど、シャケ。今年はトバ。トバを糠して。トバを巻いて。
- (持田) なるほどね。
- (古賀) おいしそう。
- (山本) トバだと味が出るよね。だしが出るというか。
- (飯居) 皆さんのところね、鯛なんてついてました？
- (山本) なかったです。
- (大本) なかったです。
- (飯居) ですよ。
- (山本) シャケですよ。
- (飯居) か、飯ずし（註8）。
- (山本) 飯ずし。
- (飯居) 鯛は？
- (古賀) 鯛は、僕もなかった。
- (飯居) あれ、鯛ってなかったっけ？
- (古賀) ここ（図2）には入ってるんですけど。よく食べていた正月料理の中にはなくて、それ、調べた…
- (持田) 調べたやつに。
- (飯居) そうでしょう。
- (古賀) そうです。出てきてたって感じです。
- (持田) 一般的には鯛って使っているけど、実際には作っていない。
- (古賀) うちの、そうですね、家庭では。
- (山本) 鯛とかエビが入っているって、すごい高級でしたよね。
- (飯居) エビもね、ちっちゃくて、こんなボイルした…
- (山本) はい。そんな感じでしたね。
- (飯居) あんなのも。でも、そんなにエビ、タイは。
- (大本) なかったですよ。
- (持田) これ、でかい。これ、何エビっていうの？車エビ？何だろう。自分が〔アレルギーで〕食えないもんだからまったく興味がない…。これ、何エビ？
- (大本) 何エビでしょうね。分からない。何かボイル…
- (山本) ボイルしてあるから。
- (飯居) ボイル。味付きのボイル。
- (古賀) 全然こだわってないんで。
- (持田) エビは、もっと小さいやつはこの辺では？
- (大本) ちはなかったですね。エビもタイもなかった。
- (持田) 北海道でもサトイモは入れるんですか？
- (山本) サトイモを入れ…
- (飯居) サトイモもあんまり…
- (山本) 入れてなかったと思う。
- (持田) やっぱりね。
- (飯居) 食材としてそろっていただろうか？
- (持田) ないでしょうね。
- (山本) なかったと思う。
- (古賀) サトイモ、入ってましたね、うちは。
- (持田) 遠軽の方では入っていた。
- (古賀) 僕、入っていたので、これは入れました。煮物は、具材はもう全部、祖母が入れていたやつにしたので。
- (持田) やっぱり向こうから持ち込んで…。今は手に入るからね。
- (山本) ニンジン、ゴボウ、シイタケ、こぶ、あとなんだ、ちくわとかなるとか。
- (大本) 煮物は全部あれですか？
- (古賀) 分けてですか？
- (大本) 1つに。
- (古賀) 1つに。
- (山本) 1つずつ？
- (大本) みんなですか？
- (山本) 全部一緒。
- (古賀) 一気に。
- (飯居) ごった煮。
- (大本) 私は全部別々に煮るから。

- (山本) え、煮るの?大変。
- (持田) 全部別々に煮る。
- (古賀) 調べたら、それも出てきたんですけど、もうあきらめましたね、早々にして。
- (山本) そうか。一緒にすると崩れるものもあるもんね。おいもや何かは崩れるし。
- (大本) サトイモは。
- (古賀) すごいな。ばらばらで…
- (持田) 全部味が違うってことですか?
- (飯居) 味付け変わってくるわ、それだと。
- (山本) 微妙にね。
- (大本) 微妙に違うけど。一緒に煮るものは、コンニャクとシイタケは一緒に煮て。
- (持田) なるほど。
- (飯居) “くりきんとん”はありましたか?
- (山本) なかったです。
- (飯居) でしょう。私もね。
- (山本) 子供のときはなかったです。
- (古賀) 本当ですか?
- (飯居) 私の時代も“くりきんとん”はない。
- (大本) “くりきんとん”は、その仕事をさせられましたもん、子供のころ。
- (山本) だって、サツマイモ、そんなにありました?子供のとき。
- (飯居) サツマイモも石焼きいもを切ったのを買ったのが、でもそんなに。
- (大本) 川越(註9)の近くにサツマイモが…
- (山本) サツマイモはぜいたくなものだったような気がする。
- (飯居) 石焼きいもは来ましたよね。
- (山本) 来ました。
- (持田) サツマイモを入れた。
- (飯居) サツマイモは、そのお正月に。
- (大本) “くりきんとん”…“くりきんとん”はサツマイモです。
- (飯居) サツマイモ、何か書いてあったね。サトイモか。
- (古賀) [自由研究の中には]ないです。
- (持田) “くりきんとん”の代わりにサツマイモ。
- (山本) “くりきんとん”ってサツマイモとクリで作るから。
- (持田) 両方とも作るんですか?分からないな、それは。
- (飯居) 正月にサツマイモはないかも。
- (山本) なかったかな。
- (飯居) でも、天ぷらには欠かせなかった。
- (山本) はい。そして、今みたいにサツマイモの種類がなくて。
- (持田) そうですね。
- (山本) 紅……、赤っぽい、ちょっとおいしくないのしかなくて。
- (大本) 色が出ないんだよね。
- (山本) そうそう。そういう。今ならあったけど、今みたいなおいしいイモはなかった。子供のときに。
- (持田) だから、あれですかね。洞爺湖の方で売っている…何だっけ?何か、ナントカまんじゅうみたいな。
- (関谷) ワカサイモ。
- (持田) ワカサイモか。サツマイモが食べたくて食べたくて…あれ豆から作ったんですよ。
- (山本) あれはイモを使ってないんですよ。
- (持田) 使ってないですよ。豆で。
- (山本) ワカサ“イモ”なのに、イモを使ってない…
- (持田) 入植した人が、どうしてもサツマイモを食いたいって言って、豆を工夫して作ったという話。皆さんのところで、あと違うのってありますか? だいたい、あとはもう同じ。
- (円子) 覚えてない(笑)。
- (持田) ちなみに、皆さんのところでは、今もこういうふうに作っています?
- (飯居) いや、もう。
- (持田) 昔は作ったんですか?
- (飯居) 記憶はあるけど。
- (持田) 全部じゃなくて、この中の一部を作るという感じですか?
- (円子) かもしれん。で、また、ほかのものも何かあるし。
- (持田) ほかのものはどうなんですか?
- (円子) 分からない。
- (飯居) きんぴら。
- (持田) きんぴらね。
- (飯居) ああいう形でゴボウは出なかった。
- (持田) そう言われてみれば、そうだな。確かに。
- (飯居) ああいう形では出なかった。
- (大本) みんなきんぴら入れる?
- (飯居) きんぴらで…
- (大本) うちのはゴボウの肉巻き。

(古賀) そう言われたらそうなのか。

3. 飯ずしについて

(飯居) あとは、ここにはないけど、飯ずしは欠かせなかった。

(山本) ありましたね。

(飯居) 昔は、ハタハタ(註10)。子供にはちょっとあまり、そんなに飯ずしはまだ。今ならもうオーケー。ウエルカムだけど。

(持田) ハタハタを飯ずしにした。

(飯居) うん。ハタハタ、シャケ。

(山本) 昔は飯ずしはハタハタだと思う。

(持田) そうなんですか？

(山本) ハタハタですよ。あの卵が何ともいえない。

(飯居) ぶちぶちがね。

(山本) シャケの飯ずし(註11)じゃなかったと思う。

(飯居) 昔、なかったですか？シャケの飯ずし。シャケの飯ずしはなかったんですか？

(山本) 私は食べたことは…。場所が違うからかな？

(飯居) そうか。飯ずしは何種類かありましたよね。

(山本) あったけど、こんな箱でハタハタを買ってきて、親が一生涯命頭とあれをきれいにして、そして作っている姿を見ている。

(持田) ハタハタってどこで獲れるんですか？

(飯居) 秋田。

(持田) じゃあ、向こうから持ってくるんだ。あ、この辺でも捕れるんですか？沿岸で捕れる？

(飯居) 流通するほど捕れてます？

(円子) Aコープ(註12)に入っていたのが、広尾かどこかの…

(持田) そうなんだ。

(円子) そこで毎年。

(飯居) 私はもう、秋田の方から来ているのかなど。

(円子) それこそここで買って、飯ずし漬ける。でも、もう大変だから2年ぐらい前からやめた。

(山本) あれ、おいしく漬ければおいしいんだけどね。失敗すると、もったいない。

4. 正月料理と年越しの準備

(持田) 古賀君はこれ、仕込みも含めていつぐらいからやったんですかね。ここには29日からって書いてあるけど、これは作り始めた、実際に調理を始めたのがここ。

(古賀) そうですね。29日から。

(持田) 下処理とかはもっと前から。

(古賀) いや。

(持田) も、29日。

(古賀) 買い出しとかだと、もっと前からやっていたけど…。そうですね、29日。

(持田) 皆さんのところは、だいたいいつぐらいから作ったんですか？

(山本) 12月に入ったら、ぼちぼち揃えていきます。

(持田) やっぱ12月に入ったらすぐ。

(山本) はい。

(持田) それは作り始めるのが？

(山本) 27日、28日ぐらいから。

(大本) そうだね。

(持田) やっぱそのぐらいから。買い始めるのが12月に入ったらすぐぐらい。

(大本) あまり早く作ると。

(山本) なくなっちゃう。

(持田) それはそうだ(笑)。

(大本) なくなるというよりも、いたむ。

(山本) いたむから。昔はそんなことなかったけど、今はいたむ。

(大本) 味を薄めに作るから、いたみが。

(古賀) 早いんです？

(大本) 早いかも。

(山本) でも、子供のころは濃かったよ、味が。

(大本) もっと濃かった。

(持田) 保存用ということですか。

(山本) うん。

(大本) 日持ちするようにね。

(飯居) レンコンって一般的でした？

(山本) いや、なかったです。

(飯居) ですよ。

(持田) レンコンもこの辺はないかも。

(飯居) ですよ。今はもう、どこでも売っているけど。

(大本) そうですね。こっちへ来て、一番食べたいなと思ったのが、サトイモとレンコンが食べたくて…。もうスーパーには売ってなかったし。

(久我) あとクワイもなかったよね。

(飯居) クワイもなかった。クワイなんてなかった。

(大本) クワイは、あの…裏の池に父親が作ってて…。だけど、おいしくなくて食べられなかった。

(山本) あれは大人の味なんだって。

(持田) レンコンがやっぱり珍しいというか…。やっ

ぱり古賀家のおせちと、それから上の自由研究
でしたおせちと、実際にこの辺で作ったおせち
というのは、いろいろ違いがあることはあるな
と。でも、やっぱり27日ぐらいなんですか？

いつまでに作らなきゃいけないとかあるん
ですか？

(山本) ないんじゃない？

(持田) それは特にない。

(大本) ないと思うんですけど。子供のころは、親の
ふるさとというか、実家へ行ったときには、年
越しが全部おせちが並ぶんです。

(持田) やっぱりそうなんですか。

(大本) 新潟なんですけどね。おせちが並んで、そこ
で家長があいさつして、一人一人にお年玉を。
全員に、そこにいる者全員に渡して。

(飯居) 暮れのうちにお年玉。

(大本) 暮れのうち。31日に。

(飯居) 年越しそばはいつ食べました？

(大本) 年越しそばの記憶がないんですよ。

(飯居) うちの31日のお昼。決まっていたね。

(大本) おせちは、そうやって31日に食べてん
ですけど。でも、うちの親は、それはしなかつた
ですね。やっぱり元旦におせち。

(持田) 古賀君のところは。遠軽では、いつからお
せちを食べていました？

(古賀) 食べ始めですか？

(持田) 元旦になってから？

(古賀) 元旦になってからでしたね。31日はわりと
豪華な食事が出て。

(持田) おせちではないけど、何か料理…

(山本) 鍋とか焼肉とか。

(持田) あくまでもお正月料理は元旦なんだ。一般的
にはよく北海道は前日の大みそかからおせち
を食べて年を越すとはいいですけど(註13)、
でも、今の大本さんの話だと、新潟なんですよ
ね、それは。

(大本) そう。新潟でした。小千谷(註14)。

(山本) 私は、子供のときはおそばだったよ。夕ご飯
がおそばみたいな感じだった。

(持田) 大みそかの？

(山本) 大みそかの。31日。

(飯居) おそばだけ？

(山本) それに何かちょっと。

(飯居) おかずが何かあるような…

(山本) おかずは何か。でも、おせちという、そう
いうものじゃなくて、なま酢があったりとか、
ちょっと単品が並ぶぐらいで。

(持田) そろった料理は元旦になってから。

(山本) そうですね。そんな感じだったね。

(持田) ちなみに、浄土真宗のお寺はお正月飾り付
けを、31日の午前中にやるって聞いたんですけ
ど、そうなんですか？

(飯居) そんな決めてはやってない。合い間見て。

(持田) あれは、ただ教科書的に書いてあっただけか。

(飯居) そうかもしれない。餅つきの日にちは何か決
まっているらしいんですよ。

(大本) 28日とか。

(持田) あ、餅つきの日だったかな？ 何か神社系と
お寺系の違いはないかなと思ったときに、お寺
の中で浄土真宗系だけ、お餅をつく時期か何か
が、鏡餅を作る時期か何か決まっているって聞
いたんだけど(註15)。

(飯居) 27日か28日ぐらいかな。

(山本) うちの実家が天理教だったけど、27日に毎
年ついていた。

(飯居) それぐらいですね。

(持田) お餅はついたりはしていました？

(古賀) してないですね。家では。

(持田) お餅は買っていた。

(古賀) それこそこういう場でのイベントとかに行
てみたりはありましたけど。家ではなかつたで
すね。

(山本) 1日がかりだもん。朝起きたら音で目が覚
める。前日はあんこを火にかけて、それを。

(持田) あんこ？

(飯居) あん餅。

(山本) あん餅を作るあんこ。

(持田) 一般的にあん餅を作るんですか？

(山本) うん。あんを作るんですよ。

(飯居) あん餅。

(持田) あ、そうなんですか。

(山本) 小豆で。それを何日前から仕込んで、母親
が味をつけて、それを焦がさないように子供が
練っている役。それでやけどをするの。ぶす、
ぷすって。

(持田) やけどをして年を越す。

(山本) そう。それを前日に。それをし始めると、
餅つくんだなという。

- (飯居) あん餅は欠かせないよ。
- (山本) そう、あん餅は絶対。どこでもやっていますよね。
- (飯居) 私も小さいころから。だから、餅つきの日のはあん餅と、あときなこと納豆と。
- (山本) つきたてを入れて食べますね。杵と臼で立ってやるから。
- (持田) お正月、あん餅食べた？
- (古賀) おはぎでした。
- (飯居) おはぎはないな。
- (持田) お正月に？
- (古賀) おはぎでした。
- (飯居) おはぎはお彼岸でしょう。
- (古賀) うちはおはぎでした。
- (飯居) ぼたもちはお彼岸でしょう。
- (持田) 遠軽から一番近いのは、たぶん北見の関谷さんだと思うんですけど、関谷さんのところはあんこでした？お餅。お正月。
- (関谷) そうですね。母方の実家が佐呂間なんです。栄(註16)というところなので、遠軽に近いといえば近いですね。
- (古賀) 近いな。佐呂間なら。
- (関谷) 確かに餅つきましたね。
- (持田) で、あんこ餅を作るんですか。
- (関谷) あんこ餅ですね。
- (持田) “あんこさん”とかよもぎ餅とかも作った。
- (飯居) よもぎは5月でしょう。
- (山本) 冬はつかない。
- (飯居) 冬、とっておくのか。乾燥させておけばいいといえいいけど。
- (円子) だって、冬しかつかんもん。餅は。
- (山本) そう。暮れもそう。だって、すごい量をつくらから。
- (飯居) お彼岸のとき、つきませんでした？ うちもつかないけど。
- (山本) つかなかったけど。
- (円子) それこそ何臼もつくからさ。
- (山本) うん、そうです。
- (久我) 豆餅もつくよね。
- (飯居) 豆餅。黒豆入れる豆餅。
- (久我) あときなこと餅とか。
- (持田) 豆餅というのはうちもあったな。うちは神奈川なんですけど。あんこはなかったな。
- (久我) きびが。
- (山本) きび餅も。
- (久我) きび餅もつくね。
- (山本) そう！きび餅がおいしいの。
- (持田) きびが混ざっているってこと？
- (山本) そうです。
- (持田) 黄色い粒々が入る。
- (山本) 豆餅が、ふかすときに黒豆を上にお米の上できれいにやって、それを一緒にふかすんだよね。そして、開けてついてたから。
- (大本) それは“くろんこ”の豆じゃなくて。
- (山本) でも、“くろんこ”のもあればつぶれているのもあって。そして、ちょうどいい塩加減ですよ。あれ、三日月形なんですよ。半三日月というの。
- (飯居) 割れたらね。
- (山本) そうです。こういう感じで作って、割れたらこういう、切ったらこういう形なんですよ。
- (関谷) そうですね。
- (持田) お餅を？
- (山本) 豆餅。今、売っていますでしょう。こういう形で。切れているやつが、ひし形みたいの。こういうふうに長く作って、包丁で切ると、こういう。
- (久我) 柿の種のあれみたいで。
- (持田) 中華まんじゅうみたいな形していたやつ。
- (飯居) バナナ型の。
- (持田) それもこの辺じゃないのかな。関東では見たことないな。
- (飯居) 豆はあったからね。
- (山本) だから、3種類から。あんこを作るから4種類ぐらい作ったのかな。主流は四角い餅。
- (持田) ああ、四角い餅。
- (飯居) 持田君のところは丸いんかい？
- (持田) いや、四角でしたね。ちなみに、お雑煮は、皆さんのところは、今日集まっている皆さんは四角ですか？(註17)
- (全員) 四角！
- (持田) で、焼いてから入れます？
- (山本) 焼いてから入れます。
- (円子) 焼いて。そうだね。
- (飯居) 軽く。軽く焼いて。
- (山本) でも、嫁に来たら違った。
- (持田) うちの実家は焼かなかったですね。そのまま煮込んで。こっちは来てから「へえ、焼いてか

- ら入れるんだな」と思って。
- (飯居) かりっとしていい。かりっとした感じが。
- (持田) おいしそうですね。
- (山本) あれ、焼いた後にお湯か何かにくぐらせてから、食べた。
- (大本) でも、最近、それが面倒。焼いたらすぐ入れちゃうんですよ。
- (持田) その話を聞いて、焼いてみました。やっぱりうまいですね。かりっとしてね。あれはね。
- (飯居) うまいね。
- (山本) 香ばしくておいしい。それも薪ストーブの上で焼いた。
- (飯居) そうです。うちは石炭ストーブでした。
- (山本) 網を引いて。薪ストーブの上に置いて焼いて。それもひっくり返すのは子供の役目で。
- (持田) 古賀君は、このときはお雑煮は作ったの？
- (古賀) お雑煮は作ってないですね。でも、実家と祖父母家でいつも食べていました。
- (持田) 父方も母方もお雑煮は同じ感じでしたか。
- (古賀) しょうゆベースで焼いた餅を入れているのは同じです。
- (持田) 具は覚えていますか？サトイモは入っていた？
- (古賀) 入ってないです。
- (持田) 鶏肉は入っていた？
- (古賀) ニンジン、ダイコン、鶏肉、お餅…
- (飯居) みつば。
- (古賀) みつば、載っていたような気が。
- (飯居) 青いもの。何か。
- (持田) かまぼこは？
- (古賀) 入ってないですね。
- (飯居) なると、入っていた？
- (持田) なると、入っていました。ちなみに、なるとのことを“つ”っていいいます？“つと”っていいいます？
- (山本) “つと”は、また別でしょう。
- (持田) やっぱり別なんですか。
- (山本) なるとは。
- (大本) “つとなると”っていうじゃない。
- (山本) だけど、“なると”は“なると”で、“つと”は“つと”で売っているじゃん。
- (飯居) “なると”はくるくるっと。
- (山本) はい。
- (飯居) “つと”ってどんなんでした？
- (山本) のの字になって。赤い。
- (飯居) そうそう。くるくるっと。
- (持田) あれはお雑煮には入れない。
- (山本) 入れました。
- (飯居) “つと”ってどんなんですか？
- (山本) “つと”って、ただ細くて。のの字だけれども。
- (飯居) 練り物には違いない。
- (山本) そうそう。
- (飯居) 練り物には違いなくて。
- (山本) 違いないし、白と赤があって。
- (飯居) 何か模様は入ってない。
- (山本) 中にちょっと何か。
- (持田) 中に“つ”って文字が。模様になるとの渦巻きじゃなくて、断面がつの字状。
- (飯居) そんなあったかな。
- (山本) あります。
- (古賀) かまぼこを調べたときに出てきた。
- (持田) 使ってなかった？
- (古賀) 使ってないです。
- (関谷) 給食のラーメンに入れます。
- (飯居) あ！
- (山本) そうだ。給食のラーメン！
- (飯居) 言われてみれば。
- (持田) 給食に出るんですか？つと？
- (関谷) はい。今も使っています。
- (持田) 今も使って…。そうだ、関谷さんはもともと給食センターにお勤めでしたね。
- (山本) “なると”と“つと”は別ですよ。
- (関谷) 別です。
- (持田) 今だと、どこに出るんですか？汁物に入っている？
- (関谷) ラーメンの…しょうゆラーメンのときに必ず入れます。
- (飯居) 言われてみれば。
- (山本) ラーメンやったら入れるわ。
- (持田) 私は、実は“つと”というものの存在を知ったのは、今年の年末なんですよ。去年の年末か。それまで知らなくて。
- (関谷) 私も給食センターに行ってからです(笑)。それまで知りませんでした。なるとしか知らなかった。
- (持田) 調べたら、日本かまぼこ協会の資料(註18)を調べたら、“つと”と“なると”は作り方がちょっと違うんですね。

- (山本) 材料は同じですよ。
- (持田) 材料は同じなんだけど、どっちかが何か、蒸すか何かするんですかね。工程の関係がちょっと違うんだという。
- (飯居) どっちも蒸すんでないの？
- (持田) かまぼこだから、どっちも蒸すのか。どこかの段階で何か違いが…
- (飯居) 練り物は、蒸さないものにならない。
- (持田) だから、同じかまぼこでも“なると系”と“つと系”は、分類が違うらしいですよ。
- (飯居) 魚の種類が違うんだらうか？
- (持田) 魚は同じようだったんで、作り方が違うんだと。
- (飯居) 練り方が何か違うとか。
- (持田) 何かたぶん、そうなんだと。
- (飯居) 混ぜるものが何か違う。
- (持田) 練り工程か仕上げ工程に、“つと”は何か1工程入るんだそうなんです。ただ、“つと”が普及しているのは、北海道の中でごく一部だそうです。私はこの辺しか聞いたことなかったんですけど、この辺の給食に出ているということは…
- (飯居) “つと”の製造元はどこなんです？
- (関谷) 帯広だと思います。製造元は。
- (持田) 聞いたことないでしょう。初めて知ったんだよ。
- (関谷) 北見にもない。
- (持田) 断面が“つ”ってどういうことだったんですかね。
- (山本) あれ、でも、子供のときから、“なると”と“つと”って。
- (大本) 私、同じものだと思ってた。
- (持田) 山本さんは、福山でしたっけ。
- (山本) 私はここ。主人が福山（註19）だからあれだけど、でも、しょうゆラーメンにはなるとの渦巻きと、また、別に“つと”も入っていたし。
- (大本) 両方入っていた。
- (山本) 入っていた。何か。
- (持田) 結構聞くと、どうも四国なんですよ。あっちの方は“つと”ってのがもともとあって。四国系の入植だと、この辺だったら音更とか幕別とかに向こうの団体が多いんですけど。あとは北海道だと、日高に多いみたいなんですよ。実際、かまぼこ協会の資料を見ても、消費地、北海道だと日高沿岸地方なんですけど、十勝にもあるんですよ。そうしたらね、うちに給食が出ているということは、たぶんもともとそういう文化もあるということなんだろうからね。
- (山本) だって、“つと”ってつゆ物に使ってましたよ。そばの中に入っていたりとか、うどんの中に入っていたりとか。
- (持田) それはやっぱりなると系と同じような使い方をします。
- (山本) 使い方は同じ。ただ煮物になると、“なると”だったかな、うちは。
- (飯居) 茶碗蒸しには入りました？
- (山本) なると、入りました。
- (飯居) 茶碗蒸しね。
- (山本) はい。だから、雑煮でも…
- (持田) そうか。浦幌にも“つと”文化あるのか。面倒くさいな。
- (飯居) 大みそかは茶碗蒸し欠かせなかった。
- (山本) そうです。
- (持田) 茶碗蒸し。茶碗蒸し食うの？
- (山本) そう。茶碗蒸しが出ます。
- (飯居) 大みそかの夜は茶碗蒸しは欠かせない。
- (持田) それは大みそかに食べるんですか？
- (飯居) 大みそか。
- (持田) おそばと一緒に茶碗蒸し。
- (飯居) お昼に食べたか、夜だったかちょっと。
- (持田) でも、大みそかのうちに食べる。
- (飯居) 元旦から茶碗は蒸さないな。そんな蒸しごとなんかしないですもんね。
- (大本) 元旦だったような気がしますけど。
- (持田) 元旦に食べました。
- (大本) 元旦に。
- (持田) でも、うちも元旦なイメージあるな。
- (山本) だって、31日にまとめて作って、温かいのを31日に食べて、1日に冷えたのを食べる。
- (持田) ちなみに茶碗蒸しには何が入っていますか？
- (飯居) 昔、栗ってすぐ手に入りました？
- (山本) なかったです。
- (飯居) 銀杏みたいなニセモノの何かね。
- (山本) 子供のときはなかったです。
- (持田) でも、銀杏は手に入ったんですか？
- (山本) いや銀杏もなかったような気がする。
- (飯居) 何が入っていたんだらう。
- (大本) こっちへ来てびっくりしたのは、栗が入って

いることでびっくりしました。銀杏しか食べた
ことなかったから。

(大本) 栗って、でも、栗は小さいときはなかったか
ら。

(持田) それは、大本さんは埼玉の時代の話ですか？

(山本) そう。

(持田) 埼玉の時代に銀杏しか知らなかった。

(山本) ニンジンとかシイタケに鶏肉に、あと”なる
と”に、あと”みつば”が載っているか、”みつば”
がなかったらホウレンソウ。青いもので彩り。
栗とか銀杏は入っているイメージがない。

(持田) 小松菜とホウレンソウはどっちですか？

(山本) いやホウレンソウ。小松菜はちょっと苦味が。
私は好きじゃないから。ただ、結婚して、山本
の親が作った茶碗蒸しには栗が入っていた。そ
して、母は九州から来ているみたいだったから。
何かちょっと微妙に違った。でも、うちの茶碗
蒸しは具だくさんって、サツマイモが入ってい
た。

(持田) 栗とサツマイモが両方入っていた。

(山本) 入っていた。そうです。

(古賀) すごいですね。

(持田) それは、ちょっと入れ過ぎな気がします。

(山本) ところが、それがおいしいの。

(持田) まあ、おいしいでしょう。

(古賀) イメージできない。栗とサツマイモをどうい
うふうに。

(飯居) 茶碗蒸しはねえ、ごちそうでした。

(山本) あれは絶対31日に食べるものですよね。

(飯居) ごちそうでした。

(持田) 関谷さんも31日。

(関谷) そうですね。でも、正月も食べたんじゃない
ですかね。

(山本) 残り。だって、たくさん作りませんでした？

(関谷) たくさん作りましたね。

(古賀) ないな。その文化は。

(大本) 元旦だったような気がするから、いつも元旦
に。

(山本) 元旦の朝。だって、おせちって、結局、お正
月から包丁を使わないための料理でしょう。

(大本) そうなんだね。

(山本) だから、あまり料理をしなくてもいいように
ということのものだから。

(大本) 具材は全部そろえとく。そいで、人が集まっ

て来たら、そいで、茶碗蒸し作る。

(山本) なるほどね。

(持田) ちなみに何かおせちもお雑煮も、本来は年神
様にささげるお供えらしいですけど、そういう
意識はありましたか。

(飯居) ない。

(大本) ないです。

(飯居) 自分たちがお正月に美味しいものを食べる。

(持田) まあ、そうですね。古賀君んちは神棚はあっ
たの？

(古賀) 神棚というか、宗教関係は、実家は何もなかつ
た。

(持田) 何もなかった。仏壇ない？

(古賀) 仏壇も無いです。

(山本) うちの天理教だったから、一番最初には、神
さんに水をあげてから食事だったよね。

(持田) 天理さんの神棚は、同じような神棚ですか？

(山本) 神社と同じ感じで、こんな大きいおかがみさ
んが神様で。

(持田) 今度、新倉さん(註20)のところに調べに
いこうと思っているんですけど。

5. 正月飾り

(大本) テレビでやっていたんですけど、お寺さんで
ご近所の方たちが、檀家さんたちが31日にお
供えのお餅を持ってきて…尼寺さんで。そして、
みんなお飾りも31日に飾っていた。一夜飾りっ
ていけないって言われてきたけど、いいのかな。

(飯居) それじゃ間に合わない。

(大本) 思っていたんですけど。

(持田) 私が見た文献でも、それがその浄土真宗系
だったので、その資料では見たんですけど、お
寺の中には31日にあえてやるところがあるら
しいんですよね。それが、その尼さんのところ
なんですよね、そうしたらね。神社とかが中心で、
一般的には31日はやることじゃないと言われて
てはいますよね。

(山本) 絶対、女はやらない。

(持田) なんかそういうところもあるみたいですね。

(山本) うち、だからずっと父親がやっていました。

(大本) うちも、父親はなんか普通にやっていたけど。

(持田) 神棚の上に「雲」って書きます？書かないか。

(古賀) 紙の上に書くんですか。

(持田) 神棚の上に、さらに何か物置スペースがあっ

たりなんかするところは、神様が一番上だよということを示すために、半紙に「雲」って書いて貼るんだそう。

(関谷) 貼っていますね。

(山本) 「雲」って漢字で？

(関谷) はい。

(持田) あと、最近売っている神棚って、ここに雲模様が最初から彫ってあったりするやつもあって、それはそういうしるしなんだとかという。これに雲模様が付いているやつもあるし、これはないので、半紙に「雲」って漢字を書いて、この上に、壁にべたって貼る…

(関谷) 壁というか、上に貼っています。

(持田) 上に貼っているんですか？

(関谷) 2階がありますから。

(持田) そうなんですね。その習慣、僕は関東にいたころは知らなかったんですけどね。

(古賀) 知らないな。全然違う。

(持田) [自分たち] キリスト教はその辺はいいかげんなんで、上に何があるのが何もしません。飾り物でいうと、これは山本さんから提供いただいたんですけど(図5)、昔はしめ縄を浦幌でも作っていたそうですんで、スゲ刈りからやったという話ですよ、こっちが。このスゲでしめ縄を作るといのは、たぶん北海道特有なんですよ。向こうは稲わらで作るんですけど(註21)。「古賀君のところは」しめ縄も飾ってはいなかったんでしょう？

(古賀) 飾ってないですね。実家は。

(持田) 実家は、正月飾りみたいなのは、じゃあ全然しない？

(古賀) はい。

(持田) なるほどな。玄関にこういうのを貼ったりとかもしない？

(古賀) しないですね。

(持田) 繭玉とかもやらない。

(古賀) 母方の祖母の家にはありました。神棚もありました。

(山本) 玄関のところに飾って。ミカンだけ。あれ何だろう？ミカンって。

(飯居) 太陽ですよ。

(山本) そうなの？

(飯居) 太陽。

(山本) 太陽なの？

(飯居) 日の出。

(円子) 松の枝と一緒に、ミカンと…縄を…

(山本) 玄関のところに、松とそしてミカンを差しているから。

(持田) そうなんですよ。実はこれは、本州型の門松で、北海道の門松は、本来的にはただトドマツとかの枝を玄関に、ミカンとかと一緒に飾るんですよ(註22)。

(山本) あれ太陽なの？ミカン(註23)。

(飯居) お供え餅の上に載っけるのは太陽。

(山本) だからなんか。

(持田) 本当はこれ[北海道の門松]を飾りたかったんですよ。12月の中旬までは覚えていたんですけど、その後、忙しさにまぎれてすっかり忘れちゃって、やばいと思って100均でこれを買ってきたんです。なので、絵だけなんですけど、本当はそうらしいですね。お正月の文化といいながら食べ物の話ばかりして時間がたちちゃいましたが、やっぱりいろいろありますね。

(円子) トドマツの枝にミカン、途中ぐらい、下の方。

(山本) 真ん中辺だと思う。

(円子) 真ん中ぐらいかな。この辺で釘で打って。今、釘を打てないから、付けてないけど。

(持田) やっぱり太陽？

(円子) よく分からないです。

(持田) 何か資料的にはそう言いますよね。ミカンはね。ただ、ミカン昔貴重じゃないですかね。北海道はね。

(山本) と思う。

(円子) 貴重といえば貴重だけど、それほど珍しいものじゃないですよ(註24)。



図5 かつて浦幌で製造・販売していた「しめ縄」など正月飾りの見本。(山本ひとみ氏寄贈資料、浦幌町立博物館所蔵)

(持田) ちなみに、これ山本さんにもこの間聞いたんですけど、このお正月飾り、コンブを付けましたか？

(山本) コンブは付けたよ。

(円子) 何ていうの？あれ、横に張るやつ。

(持田) こういうしめ縄みたいなやつ？

(円子) しめ縄ではないんだけど。

(久我) 簡単なのだよね。

(円子) それには、コンブを挟んだりしたよ。

(持田) しめ飾りではなくて？

(飯居) ひもみたいなやつ。

(持田) 縄何とかってやつ。

(山本) しめ縄。

(持田) しめ縄ではなくて。

(飯居) 紙のひも…違うか。

(久我) いや縄だったよね。

(飯居) ただの縄。

(大本) 玄関に縄みたいなの、こう。

(山本) そこに絵が出ていると思う。

(持田) 絵が出ている？〔図5のポスターを見ながら〕
これ？ごぼう締めじゃなくて。

(山本) 〔図5のポスターを指して〕いやこれだもん、これ。スゲ縄。これ。2間とか1.5間（註25）とかあって、これはまとまっているだけで、これを長くして端から端まで。

(持田) これ、ほどくんですか？

(山本) そう。ほどくんです。それで2軒分ありますよという。そのやつにコンブを。

(大本) 玄関にこうして。

(持田) そうなんです。武蔵女子短期大学の齊藤先生から調査依頼が来ていて、北海道でしめ飾りとかお正月飾りにコンブを飾る地域はかなり限られているので、それで、どのあたりまでが今もコンブを飾っているか。こういう展示やるなら調べてくれと依頼が来ているんですが。最近の浦幌では見ないですね。

(久我) 見ないですね。

(円子) 今、家の造りが。

(久我) 違うもんね。

(持田) 違いますもんね。

(円子) できないもん、そういうことが。

(持田) そうか。

(山本) さっきの縄も、お客さんで何人かはいます。毎年、買ってくれる人が。

(持田) 実は、これ、今年は釧路で買ってきたものなんですけど、釧路では神社とかああいいうようなところで飾り物を売っている売店の中に、今回のやつはこれはないんですが、こういう紙飾りにやっぱりコンブがついているパターンあるんですね。まさしく昔の名残なんだろうなと思うんですけど、札幌方面にいくと、それはなくなるんだそうです。積丹半島の方にいくと、また出てくるんだそうなんです。石狩や空知はおそらくないだろうなと。

(大本) コンブが採れる。

(持田) 道東の釧路にあるというのは、あまり知られてないですから、一部だけなんだろうなとは思ってますけど。

(古賀) 調べたら出ますかね。

(持田) 出るかもしれない。

(山本) しめ縄の飾りを仕入れに行ったときに、その仕入れ先のお店の人が、こっち側ならこの飾りだね、こっち側ならこっちの飾りだねって感じで見せてくれる。

(持田) こっち側というのは。

(山本) 地方。だから、十勝なら。

(持田) なるほど。風習に合わせて。

(山本) 浦幌のだったら、こっち側の飾りの中から、今年はこのとこれとこれをつけるかいみたいな。

(持田) その業者さん、紹介してもらえますか（笑）。忘れちゃいました？

(山本) それ、釧路の高橋しめ縄店といったかな…

(持田) 高橋しめ縄店？

(山本) いや、でも、今はもうやってないと思います。私がかかわっていたときでさえ、もうあと何年やれるかなって言っていたから。

(持田) なるほどな。

(山本) そこが結構、ほかのところも買いに来ていたというのが。

(持田) 今、このごぼう締めのこのしめ縄は、実は釧路市立博物館から借りてきたものなんですけど、今でも釧路で地場で作っている、太田千草園というところで作っているやつなんです。釧路で今作って、完全に刈り取りからやっているところは、3軒ぐらいしかもうない。その部分をちょっとたどって聞いてみようかなと思うんですが。

(大本) 白いひらひら。ご幣。

(持田) これ、皆さんのおうちで、神棚で飾るときってこういうしめ縄ですか？片側が太い。

(大本) うちはこちらです。

(円子) しめ縄じゃない。宝船。

(持田) しめ縄はしない？

(円子) しない。

(山本) これはごぼう締めっていうので、ごぼう締めに俵をつくったやつがこう、並んでそれが、うちはそれが飾ってあるけど。ただのゴボウだったらゴボウ。

(持田) だいこん締めってありますよね。真ん中がちょっと膨らむやつ。

(山本) ああ、何か。

(持田) あれをやったりもしますか？このあたり。

(山本) あれは、両サイドに飾る感じで。また、飾るところが違うという、だよ。そして、両国、浦幌のちゃんこ屋さん。あそこでしめ縄を頼まれたときに、すごい、こんな長くてこんな太いのを何本も頼まれて。それは、やっぱり何かお相撲に関係あったのかな。まとめて取り寄せてくれたから。

(持田) あとは両国の母さんは稚内〔の出身〕ですよ。ね。

(古賀) そうか。それもまた。

(持田) あっちの方〔の文化〕かもしれないですね。

(古賀) 影響するんか…

(持田) これを、うちの博物館で展示の写真を見た、上川の博物館の人は、ごぼう締めなんて見たことはない。うちの方ではこんな片側が太いしめ縄なんていうのは1軒もないぞって。やっぱり両側が細くなって行って、真ん中が太いやつ。どんな神棚でもそういうのを作ると。ただ、神社は、八幡系の神社と稲荷系の神社で違うという地域もあるらしいんですけど。うちあたりを見ていると、だいたいこの片側が太いやつが浦幌周辺は多いみたいなき感じでしたけど。ただ、私がちょっと見た範囲なんで何ともいえないですけど。

(大本) うちもこれと同じ。うち、これ〔紙垂(しで)〕、3枚しか下がってないですけど。

(持田) 私、これ、民俗学の教科書を見て作ったんですよ。そうしたら4枚だったんですが(註26)。浦幌のカタログ(図5)を見ると3枚でした。

関谷さんも3枚っていったんでしたっけ？

(山本) 4枚はないと思います。

(持田) この辺は3枚なのかな。

(山本) 3枚か5枚だと思います。

(持田) それが教科書には4枚になっているんだよね。

(山本) そうなんだ。

(持田) だから、地域に、それも違って、違うのかな。

(大本) 今年買ったのには、4枚。

(山本) 入ってた？

(大本) うん。入ってたんだよね。

(飯居) それ予備じゃないですか。予備。

(大本) 3枚しか付けたことないから。

(山本) 付けやすいように、とんがってなかった？

(大本) どうだったろう。

(持田) どうだとかって行って？

(山本) 差しやすいように、少し。

(持田) なるほど。そうなんです。ね。

(山本) あれ折るの大変なの。切って、こうやって折っていくでしょう。それ、本当、間違えたらあの形にならないの。

(大本) そうなのね。うち、子供のころ、父親が全部これを作っていたんですけど、その切り方を一生懸命見ていたけど、できないんです。

(持田) それはやっぱり稲わらで作った？ スゲで作ってました？

(山本) 白いご幣〔紙垂〕。

(持田) ご幣〔紙垂〕を。なるほど。

(大本) ご幣〔紙垂〕をね。しめ縄は買ってきていたけど、ご幣だけは父親が作って飾ってました。

(山本) だって、しめ縄、スゲを刈りに行ったのは、6月、7月、8月ぐらいで刈りに行って。

(持田) ああ、スゲだもんな。

(山本) そう。そして、洗って乾燥させて、そして、しめ縄の形にするのは10月、11月ぐらいからだも。それまで乾燥させて。組んで、そして、飾りをがーっと付けていくという。

(持田) ちなみに私の妻がスゲが専門で、去年調べてみた感じでは、外側はスゲなんですけど、よく見てみると中側はチガヤという別の植物が入っていて、それが太いからそれがかさを稼いで、外側はスゲというのが多いみたいです。断面を切って顕微鏡で見てもみたんですけど、やっぱり

細胞がそうになっているな。あと、最近は、これイグサなんですよ、実は。作っている職人さんに聞いたら、スゲはやっぱりぼろぼろちぎれて崩れてくるのが多いから、最近はおみが出ないようにイグサで作っちゃっていると(註27)。

(飯居) イグサだって、そう簡単に手に入るだろうか、今。

(持田) いや、入らないですよ。今の時代だからだと思います。

(飯居) そうでしょう。

(持田) 昔は手に入らなかったと思いますけど、それこそね。今だからこそ、こういう代用品が出てきて。

(飯居) 今でも、イグサ、そう簡単に手に入る？

(持田) 今は天然イグサ以外に栽培イグサが、高麗イグサとかそういうのが。

(飯居) 国内で栽培しているの？

(持田) 国内で栽培しています。国内は、むしろそのシェアが高まっているんじゃないですかね。昔のいわゆるイグサで。

(飯居) [生産地は]九州のどっかあっちでしょう。

(持田) 主産地はそうですが、イグサ自体は、実は雑草でその辺にも生えているんですよ。北海道でも。生産地は、北海道は少ないと思うんですけど、東北あたりまでは生産しているの。そういうふうには工業用に作っているんじゃないですかね。あと、トウガラシは浦幌で飾りますか？

(大本) 初めて見ました。

(山本) 飾らない。

(持田) 北見とか遠軽でも見ない？これ、やっぱり釧路なんですけど、釧路は鳥取からの入植が多いんですが、山陰地方は「トウガラシを飾るところが」多いんだそうなんです。出雲大社にもともとそういう魔よけ信仰が…

(山本) どこに飾るの？神棚？

(大本) 玄関？

(持田) 玄関に飾るそうです。家に魔が入ってこないように。

(山本) あの赤いのは？ナンバン？

(持田) トウガラシです。トウガラシが魔よけだというのが、出雲系の信仰ではあるんだそうで、中国地方からの入植は、こういうのはあるんだそうです。

(飯居) トウガラシのからみで鬼を払う。撃退するということ。

(持田) そういうことみたいです。「トウガラシの研究」とかいう本があるんですよ(註28)。トウガラシ信仰って結構世界中にあるみたいで。同じような感じでトウガラシを使っている国ってものすごくあるんですよ。

(飯居) 鬼をやっつけるにはいい武器だよ。

(持田) まあね。私はトウガラシ好きですけどね。

6. ローソクもらい、豆、イモ、その他

(飯居) あとは大豆だよ。

(持田) 大豆？

(飯居) 節分。

(持田) 節分か。でも、北海道は落花生なんですよ。

(飯居) まあ、でも、本来は大豆でしょう、やっぱり。

(山本) 子供のとき、大豆をいってくれましたよね。

(飯居) いや、もう落花生でした。私のとき。

(持田) 大豆でした？

(円子) 大豆でした。

(持田) やっぱりそうなんだ。

(古賀) 落花生です。

(飯居) 私は大豆はまかなかった。もう落花生だった。

(大本) みんなすごい、いろいろなものをまくんだなと思ってね。びっくりした。

(山本) 外にまくときには、落花生。だって、むいて食べられるじゃない。

(持田) お正月と関係ないけど、ろうそくを出すって行事(註29)あった？

(円子) あったよ。

(持田) ありました？

(飯居) あれば七夕か。あれ函館の方でまだあるでしょう。

(持田) 函館はどうかかな…

(飯居) やっている、確か。

(持田) 遠軽でもやった？

(古賀) 覚えてないな。

(持田) じゃあ、やってないかな。

(古賀) やってはいないと思います、たぶん。

(持田) やっぱりやったんですか、このあたり。

(山本) 七夕？

(飯居) 記憶ない。

(山本) 流すやつ？

(円子) ろうそく出して、ろうそく出せてやつ。

(持田) 家を回って。

(山本) ないわ。

(大本) 知らない。

(円子) 炭鋤(註30)ではやっていたね。

(持田) 炭鋤ではやっていました？尺別で？北見もやっていました？

(山本) ろうそく出せてどういうことですか？

(持田) ろうそく出せ、出せよ。出さないとはっちゃくぞとかって言って、家を回るんだそうです。だから、本当にハロウィーンみたいな感じですけど。

(山本) 知らない。

(飯居) ろうそくじゃなくておやつでしょう、結局。おやつでしょう。

(持田) おやつでしょう。

(飯居) おやつ。食べるお菓子とか駄菓子とか。

(持田) もともとはそうなんだと思いますよね。私、大学を卒業した後に空知の幌加内町(註31)にいたことがあるんですけど、幌加内でもやっていました。道北と函館でもやっているんですね。

(飯居) って聞いたね。

(山本) ハロウィーンみたいなものか。

(大本) そうだね。

(持田) あれ、よく分かってないみたいで、起源がね。相当昔からやっているらしいんで。そんな昔からやっているということは、本州でどこかやっていたところがあるはずなんだけど、それが出てこないらしいんですよ。何かとくっついてあるんだろうなと思うんですけどね。

(飯居) 西洋は、「Trick or treat」だよ。

(持田) 向こうはね。

(飯居) 世界的にあるんだ。それこそ民俗学。

(持田) そうですよ。そんな話をしているうちに時間が過ぎてしまいました。

(古賀) これの境界線とかたどってみたいですね。

(持田) そうだよ。境界がやっぱり面白い。境界線が面白いと思うんですよ。

(古賀) いろいろなものの境界線をたどってみたい。

(持田) よく言うのが、関西はカレーに牛肉を入れるけど、関東は豚肉を入れる。じゃあ、間の中部地方はどうなんだというのを、ずっと前にNHKか何か調べたら、ある川が明確に境目

であるんだそうです。

(大本) 意外と静岡のあたりですよ。

(持田) そうそう。どこかあるんですよ。

(大本) 境目だってやっていました。

(古賀) 川。

(持田) 川。本当に川なんです。川を渡って文化が分かれるというのがあって。中部地方の人は、自分たちは東でも西でもない。中部なんだというんだけど、牛肉を食っているから、あなたは関西だみたいな感じで。

(山本) お赤飯に小豆にするか、甘納豆にするか…うちはずっと甘納豆だから。

(大本) お赤飯もびっくりした。

(持田) 甘納豆だった？

(古賀) 甘納豆でした。

(大本) こっちに来てびっくりしたのは、お赤飯と茶碗蒸し…

(円子) 昔、ジャガイモでも丸イモは関東で、長い、メークインとか、ああいうイモは関西。市場として。

(持田) 馬鈴薯の種類ですか？

(円子) 出荷する地域。

(持田) そうなんですか？

(大本) 煮崩れしないからメークインは喜ばれるとかね。

(持田) メークインは関西？

(円子) 関西。

(古賀) そういうのもあるんですね。

(持田) それは何ですかね。料理の仕方なのか。

(円子) 何なんですかね。

(持田) いや、でも、男爵はまだシェア結構高いですよ。

(山本) でも、お店…

(飯居) メークインの方がおいしいな。

(持田) どうやって食うかによるんじゃないんですか？違うのか。

(円子) 料理とかかわっているんじゃないかと思うけど。

(持田) 使い方でしょうね、おそろくね。食材としてのね。

(山本) 子供のときにイモの天ぷらって食べました？サツマイモじゃなくてジャガイモの天ぷら。

(飯居) ありましたね。

(山本) ありました？

- (飯居) ありましたね。
- (山本) 食べた記憶がないんだけど、揚げたてはおいしくて、冷えたら食べられないっていうんだけど。
- (飯居) そんなことを言っていられなかったの(笑)。出たものを食べるみたいな。
- (山本) だけど、イモの天ぷらっていったらサツマイモだったような気がする。
- (飯居) サツマイモが主です。それは主。
- (山本) だよ。だけど、おイモで天ぷらってどうなんだろう。
- (持田) それは馬鈴薯に衣をつけてちゃんと揚げる？
- (飯居) 普通の。
- (山本) 普通の天ぷらにする。
- (飯居) 天ぷらと同じ。
- (山本) でも、私、食べたことないんだよね。
- (持田) それは誰かに聞いたんですか？
- (山本) そうです。食べたよねって言われて、いや、食べてない。イモの天ぷらはサツマイモ。
- (持田) “すあま”ってわかりますか？
- (大本) 大好きです。
- (持田) “すあま”を知らない人が多くて。
- (山本) 餅よりも柔らかくて。
- (大本) あれはどこの食べ物ですか？
- (山本) 京都か？
- (持田) 関東の方だと思いますよ(註32)。
- (山本) なかなか手に入らないんだ、今。
- (持田) この辺じゃ売ってないんじゃないですか？
- (大本) すあま？
- (持田) 紅白で。昔、めでたいときには。お餅みたいなやつですよ。
- (山本) お祝い事に出す赤と白の。入学シーズンとか。
- (持田) でも、お餅じゃないんでしょう？あれ。
- (山本) お餅ではない。
- (持田) 小麦粉か何かですか？
- (山本) だと思った。
- (大本) 何だっけな。
- (山本) 米粉か。
- (持田) 米粉か！米粉だ。それでお餅状にするんですよ。
- (山本) お餅よりも柔らかくて、京菓子よりも味が、ちょっと、しっかりしている。喉に詰まりやすいかもしれない。
- (飯居) 白玉。
- (山本) 白玉よりもちょっといいかな。
- (飯居) 白玉よりもいい。
- (山本) お店に行ったら…
- (飯居) 重箱、皆さん、こんなでした？(図4)
- (山本) いえ。違います。
- (飯居) 塗りですよ。
- (山本) はい。塗りでした。
- (古賀) 塗りでした。塗りでしたというか、塗りが普通のイメージでした。
- (飯居) これ、白木というか何というか。
- (大本) それは、たまたま間に合わせ？
- (古賀) 間に合わせというか…
- (久我) 古賀家の伝統なのかなど。
- (古賀) いや、古賀家の伝統ではなくて。お皿とかだったんで。重箱は何でもよかったんですけど、何かおせちだけだと、おせちしか使わなくなっちゃうなと思って。
- (持田) 汎用性の高いもの。
- (古賀) ほかの何かを入れたり、ケとハレでいうと、片方に寄り過ぎてないものがないなというのがある。
- (大本) これ、すてきよね。
- (山本) これいいよね。
- (久我) どこで？
- (飯居) よく最近、法事の“おとし”（註33）でこういうのが付きますよ。こうやって9つに区切ったやつ。
- (大本) このあれが入っているのがいいよね。
- (飯居) 少量多品種。
- (古賀) 鯖江というところの重箱。福井の。
- (持田) ちゃんとしたところのなんだ。
- (大本) これはどこで求められたんですか？
- (古賀) 福井県の鯖江というところの重箱なんですけど。
- (飯居) 福井？
- (古賀) ネットショッピングでいろいろ探したらあって。ちょっと、高かったんですけど、でも、いろいろものを入れて、正月じゃないときも使えるならいいかなど。
- (飯居) 鯛はどこで仕入れたの？
- (古賀) 鯛はスーパーでした。フクハラだったと思います。
- (飯居) 置いてあるんだ。
- (古賀) 正月はあった気がします。

(大本) 自分で焼いたんですか。上手に焼けているけど。

(山本) 鯛って結構、骨、食べるの苦手だよな。

(持田) 小骨が多いから。

(山本) 骨、食べられない魚だから。

(飯居) 鯛なんて、うち食べたことない。

(古賀) 本題に戻ってちょっと話すと、これ、一重箱で作ったように見せていて、そのほかにクーラーボックス1個分ぐらいの料理ができ上がってしまったんですよ。作り過ぎて。

(持田) ここに入っていない。

(古賀) はい。これは、実家で食べたときに盛り付けた映像なんですけど、これは家族3人で食べ切って、また同じ盛り付けをしたのを、きっかけの祖母は、今施設に入っていてあげられなかったんで、母方の祖父母と一緒に食べたりしていました。

(持田) 喜んでいましたか？

(古賀) まさか孫におせちを作ってもらうとはって、笑っていました(笑)。

(大本) あれはゴボウですか？

(古賀) これ、ゴボウです。

(大本) たたきゴボウか何かにしたんですか？

(古賀) そうです。

(持田) その施設に入っているおばあさんも召し上がったんですよ。

(古賀) ちょこっと。まだコロナ的に、禁止じゃない期間だったので(註34)、ちょっと入れて。お部屋で。

(持田) よかったですね。

(山本) でも、いいね。こういうふうにするのもね。ちょっと目先が変わって、大皿にバーツじゃなくて。

(持田) じゃあ、ご家族でこれは共有できた感じですか？

(古賀) そうですね。

(飯居) シェアしたんだね。いいねって言われた。

(持田) 伝えていけるけど、また作れって言われたら大変だろうけどな。

(飯居) カニは出ます？カニ。大みそかか正月か。

(山本) 出ないです。

(大本) 北海道に来てカニを知ったぐらいだから。海なし県で育っていますからね。

(山本) カニってそう食べました？毎年お正月に。

(持田) あんなものは毒なんで食わない方がいいです(笑)。

(飯居) 買って食べることはないですね。いただければという。浜の方から、厚内あたりからいただければという…

(大本) 普段だね。

(山本) 買ってまでは。こちら辺は毛ガニですよな。

(飯居) 毛ガニですね。

(持田) 今、時期でしょう。もう遅いのか。もっと前ですかね。12月ぐらい。

(山本) でも、絶対食べたのが、タコ食べませんでした？

(飯居) タコ酢があったかな。

(山本) お正月は、タコ絶対食べたよ。

(久我) 煮ダコというの。

(山本) 煮ダコ。

(持田) 煮ダコね。

(山本) 絶対食べたわ。そういえば。

(飯居) どうだったかな。タコ酢。酢の物にスライスしたのが入っていたか。

(古賀) 酢の物。

(山本) お刺し身みたいな感じ。

(持田) 酢の物に入っている。

(山本) お刺し身にして食べたよ。

(久我) お刺し身は絶対ついてるね。

(山本) マグロとかそんなのがなかった。

(飯居) 刺し身としてね。

(持田) これ、でも、これで宣伝したら、毎年受注生産して売れるんじゃない？

(古賀) 3箱限定とかいうんだったら、できますけどね(笑)。

(飯居) 3箱。食工房古賀。立ち上げたら。

(持田) そんな感じで。

(大本) だて巻きも作ったんですか？

(古賀) だて巻きも作りました。

(大本) あら、素晴らしい。

(古賀) 実はこれ、ちょっと、トラブルも起きちゃって。

(山本) “はんぺん”つぶして？

(古賀) “はんぺん”つぶしてやったんですけど、ちゃんとしたあれ、それこそ注文していたはずだったんですけど、注文を実は忘れていたというのが30日になって発覚して、手元になかったんで。フクハラに売っている手巻きずしのあれ

に、割りばしを割ったのを等間隔に置いていつて、それで、ぎざ…

(持田) この縁の…

(古賀) そうです。

(山本) これは、もう本当、溝がこういうふうにしつかり出なきゃいけないので、普通の巻きじゃなくて。

(古賀) そうです。専用のとんがっているのが本当はあったんですけど、それが買えてないというのを…

(山本) 何だっけ。鬼すだれ。

(古賀) そうです。鬼すだれ。

(大本) 鬼すだれというのがね。

(古賀) そのすだれを手に入れられてなくて。

(山本) あれでやると、ちゃんところがたがたがたつてできる。

(古賀) 断面というか、あそこが割りばしの。

(山本) でも、すごいね。ちゃんと。

(関谷) 形になっているね。

(山本) なっている。

(飯居) 黒豆のほかに花豆。

(山本) ありました。

(飯居) ね。白っぽい、黄土色というか。

(久我) いろいろしたよ。いろいろな豆して。

(飯居) ありましたよね。

(久我) 白いのから何から。

(飯居) あと、とら豆。

(久我) とら豆に。

(飯居) 何か豆は黒豆だけじゃなくて。

(久我) だって、ここ豆の産地だもん。

(大本) それもきんとの代わりに使っているの？

何かわざわざお正月に煮てほしいって言われて煮たことがあったんだけど、頼まれて。

(久我) 白花豆じゃなくて？

(大本) あれは何だったんだろう。

(山本) ただの豆よ。煮てくださいって。

(持田) 白花豆じゃなくて。

(大本) 白花豆。

(山本) だって、昔は今みたいに豆の種類、そんなになかったもん。

(飯居) 小豆、大豆、黒豆、花豆。

(山本) うずらみみたいな豆。

(持田) うずら豆ありますね。インゲン的一种ですよ。ソラマメとかもありますよね。

(山本) その5種類ぐらいよ。

(飯居) そんなもんですかね。

(持田) そうですか。

(飯居) 大納言ありませでした？

(久我) 最近じゃない？花豆というのは。北見の方でてた…

(山本) 大納言あったかも。

(飯居) 小豆のちょっと大きい、何か。

(古賀) 大納言。

(飯居) 小豆のちょっと大きいやつ。

(持田) 大納言小豆ね。

(山本) 子供だからあんまり記憶がないけど。

(大本) よくお赤飯にササゲというのを…

(久我) 茶色っぽい豆ね。

(飯居) 青いうちに食べる豆でしょう。

(大本) じゃなくて、小豆より小さい。

(飯居) ササギ？

(持田) ササゲ。

(久我) 小豆に似ているけど。

(山本) そんなの知らない。

(持田) もっと小粒のやつですよ。

(久我) 豆の種類だよ。

(持田) はい、ササゲは豆の種類。

(久我) 小豆の代わりに使ったんでしょう？

(古賀) 小豆ではないんですか？

(持田) 小豆ではない。ササゲという種類の豆。

(大本) 炊くのは、そのササゲを炊いて入れる。

(古賀) 知らない。

(持田) あれも関東じゃないですかね。

(大本) 関東のなんですかね、あれは。

(飯居) ササゲ…

(持田) こっちでは作らないんじゃないかな。

(大本) それ、一生懸命探したけどなかった。

(山本) だいたい〔本州は〕お赤飯に小豆だもん。いやいや、〔北海道は〕甘納豆だもん(笑)。甘納豆のところに、ご飯と甘納豆と、そして紅ショウガ。そこの乗ってるそのところのご飯がめちゃおいしい。

(大本) ああ、そうなんだ。

(山本) 甘くて、ショウガの味がして、取り合いになるのよ。

(大本) 今もまだ覚えている。最初に食べた感覚。

(持田) 初めて食べたときはびっくりしましたけどね。

(大本) びっくりした。

(持田) 甘いな、赤飯。

(大本) お赤飯好きって聞かれて、大好きって言って、もらって食べて、一口入れた瞬間に。

(山本) 「何だ、これ」って言ったでしょう。

(大本) どうしよう。

(持田) 最近、関東でも売っているみたいですね。甘納豆。人気なんで、北海道のやつが知られるようになって。私、出身、神奈川ですけど、神奈川に崎陽軒というシウマイ屋さんがあって、あそこの崎陽軒のホタテって道北の猿払村のホタテなんですよ。

(飯居) それは高級品でないの？

(持田) でも、あそこが生産工場なんで、実際、そのやつで作っているんですけど。それで創業何年記念か何かで、その猿払の人に甘納豆の赤飯でお弁当を作ってもらって、横浜駅で売ったら、そっちの方が小豆よりも人気が出て、それから向こうのデパートとかで最近売っているみたいですね。

(山本) あれ、だって、炊くのと蒸かすのと味が違う。やっぱり蒸かした方がおいしい。お赤飯が。もう全然違う。

(大本) そうだね。

(飯居) それは蒸かすでしょう。赤飯は蒸かすものですよ。

(山本) 昔、せいろって四角いのがちゃんとあって、それで。

(久我) でも、最近鍋で作りましょうってやっているよね。料理番組で。

(持田) 赤飯を？

(久我) 簡単にできるって…

(山本) 炊飯器でできるもん、だって。

(大本) 炊飯器でできるんだけど、やっぱり蒸かした方がおいしい。

(山本) お塩をちょっと振りかけて食べるとか。いくらでも食べられます。

(持田) じゃあ、そろそろ終わりにしましょうか。ちょっと、とりとめのない話になりましたが、しかし、やっぱりこれだけでもいろいろな話ができますから、お正月は面白いですね。

(飯居) テイスティング時間は、今日ないの？試食タイムは。

(古賀) 各自で。

(持田) これを見て想像するんですよ。

(飯居) 想像？

(持田) そう。で、来年は自分でこれを作ろうと。

(飯居) いや、そうは思わないわ。ちょっと、それは無理。

(持田) まあ、でも、いろいろな話のきっかけをつくっていただきまして、しかもいろいろなお話も聞けて。おばあさんが元気になるといいなと思いますけれども、きっかけをつくって、いろいろなそこから違いを、お話を引き出すことができたのと、浦幌で皆さんが作っていたいろいろなお話も聞けましたので、いろいろな記録にもなるかなというふうに思います。また、ちょっと、こういった感じで昔の暮らしだとか今との比較だとか、今はどういうふうに過ごしているのか。お正月に限らず、何回か座談会をやっていろいろな話を集めたいなと思っていますので、またお集まりいただければと思います。今日は、無理やり、去年「Twitter」に彼が上げているのを展示させてくれと、バイト料を払わないと…

(山本) でも、すごいですよ。これ、すごく。

(大本) [小学校] 4年生？

(古賀) 4年生です。

(山本) でも、本当にとっておいてくれたお母さんがすごい。

(持田) お母さん、すごいなと思いますしね。これを今度、小学校とかに持って行って、私としては展示したいと。

(古賀) 恥ずかしい(笑)。

(飯居) ひとつ聞いていいですか？だて巻きのところの説明で「巻きは巻物を尊ぶ縁起物」って、これ、ちょっと意味分らない(図3)。

(山本) 一番下ですね。

(持田) 巻き。だて巻きの巻き。

(飯居) 「巻く」というのは縁起がいいの？「巻きは、巻物を尊ぶ縁起物」、これ、ちょっと意味合いが…。「巻く」というのは幸福を巻き取るとか幸せを巻き取る？

(持田) たぶん、そうじゃないですか。幸せを巻き取るという意味じゃないかな。

(飯居) 巻物といたら、のり巻き。

(持田) そう。のり巻きもそうですね。縁起物。あとなるとの渦巻きもそうなのでしょう。確か巻き取るとか、幸せを。

(飯居) 巻き取る。
 (持田) たぶんそういうことじゃないかな。
 (飯居) そういうことか。巻く。
 (持田) 小学校4年生時代の古賀さんに聞いてみてください。
 (飯居) タイムトリップ。
 (古賀) むちゃくちゃ恥ずかしい。
 (飯居) でも、これ、君の場合、そんな昔の話じゃないよね。
 (古賀) 15年前ですよ。
 (飯居) たった15年前じゃん。
 (持田) 今25歳？
 (古賀) いやいや、25歳の15年ですよ。相当前ですよ。
 (飯居) 小学生っていったら、俺、40年以上前だよ。40年じゃ済まないな。
 (持田) 何年生まれということになるの？そうしたら。
 (古賀) 平成8年。1996年です。
 (持田) 1996年生まれですか？
 (飯居) ここに大きな壁が。平成というだけでここに大きな壁がある。
 (持田) そうだね。
 (山本) 大きな、大きな壁ですね。
 (飯居) ベルリンの壁のようにつぶれないよ。
 (持田) どうも本当に今日は、いろいろな話題を提供してください。
 (山本) ありがとうございます。
 (古賀) 楽しかった。こんな感じになるとは思わず。
 (持田) すみません。全然、講師として処遇していません…
 (古賀) いやいや。楽しかった。
 (持田) ありがとうございます。また何かこういう機会があったら来ていただければと思います。じゃあ、今日はこの辺で終わりたいと思いますので、皆さん、足場が悪いですが、気を付けてお帰りください。ありがとうございました。また、そのうち節分だとか、いろいろな機会にやりましょう。
 (全員) ありがとうございます。

<終了>

註

- 註1 高橋知佐子・石井香代子・近藤寛子・淵上倫子「正月料理の喫食状況：特別研究行事食・儀礼食調査広島分との比較」(『日本調理科学会講演要旨集』No.28、2016)、鷲見裕子「家族構成による正月の行事食に関する意識と実態」(『日本調理科学会研究要旨集』No.25、2013)、宮崎早花・菊地和美・山口敦子・伊木亜子・木下教子・佐藤恵・田中ゆかり・藤本真奈美・坂本恵・菅原久美子・土屋律子・村上知子「北海道の家庭料理：地域の特徴」(『日本調理科学会大会研究発表要旨集』33、2022)。
 註2 当時の所属。古賀は2022年3月で地域おこし協力隊を卒業し、同年4月から一般社団法人十勝うらほろ楽舎の社員となり、引き続き町へ残って勤務している。
 註3 NPO法人うらほろスタイルサポート事務局として活用されていた建物。2018年より、元フタバ薬局の建物を改装し、子ども達の放課後活動の拠点、地域へ来た大学生などの活動拠点など幅広く用いられている。2023年4月より一般社団法人十勝うらほろ楽舎が管理している。
 註4 遠軽町立南小学校のこと。遠軽市南町3丁目4-43に所在する公立小学校。1953(昭和28)年に遠軽小学校上遠軽分校として開校。1947(昭和22)年開校の遠軽国民学校上遠軽分教場を継承している。
 註5 北海道新聞のこと。北海道の人は北海道新聞のことを短縮して「道新(どうしん)」と呼び、十勝地方で発行されている十勝毎日新聞のことを「勝毎(かちまい)」と呼ぶ。この2紙は2023年現在、十勝地方における2大紙となっている。



図6 座談会を報じる新聞記事(十勝毎日新聞2022年1月)

註6 古賀絢子（あやこ：1943-2022）。1943年5月11日、武藤家（武藤孝一、まさ）の三女として、紋別郡下湧別村（現湧別町）で生まれる。なお、絢子の父にあたる武藤孝一の両親は、1907年に岐阜県武儀郡洞戸村（現、関市）から湧別に移る。絢子の母にあたる“まさ”の両親は、1905年に洞戸村から父が、岐阜県武儀郡乾村（現、山県市）から母が、それぞれ湧別に移っている。

註7 フクハラ浦幌店。帯広市に本社を置く株式会社福原が経営するスーパーマーケット。

註8 魚の発酵食品。飯ずし、馴れずし、生成（なまなれ）。村元直人『北海道の食』（幻洋社、2000）では、「北海道の漁村では、いずしを単にすしと呼んでいた」と述べ、材料となる魚について「特に決まった種類はなく、ニシン、ホッケ、ハタハタ、スケソウ（スケソウダラ）、サケ、カレイ、サバ、カジカなどが用いられた。とはいえ、いずしに用いる魚は、どこでも同じというわけではない。地域によって獲れる魚が違うので、食べるいずしにも違いがある」とし、「熊石町では本町地区でおもにホッケ、相沼地方でおもにスケソウ…石狩地方でハタハタ、樞法華村ではたいていの魚でいずしをつくったそうであるが、カジカのいずしはここ以外では聞かない…〔中略〕…太平洋沿岸、オホーツク沿岸の漁村ではサケのいずしをつくった」と記述している。道東の飯ずしについては、『日本の食生活全集 1 聞き書北海道の食事』（「日本の食生活全集北海道」編集委員会編、農山漁村文化協会、1986）に、釧路管内浜中町の霧多布地方の事例として「ごちそうの主役は飯ずし」の見出しのもとに「年取りからお正月のごちそうは、秋口に漬け込んでおいた飯ずしが主役であり…」の記述があり、「ますの飯ずし」「いわしの飯ずし」「はたはたの飯ずし」が紹介されている。特に「ますの飯ずし」については、写真入りで詳しく製造方法が紹介されている。

註9 埼玉県川越市。大本眞里子氏の前居住地である越谷市とは、さいたま市を挟んで西隣の市。

註10 『日本の食生活全集 1 聞き書北海道の食事』（「日本の食生活全集北海道」編集委員会編、農山漁村文化協会、1986）では、釧路管内浜中町の霧多布地方の事例として「はたはたの飯ずし」が以下のように紹介されている。「はたはたは…飯ずしにするときは生きのよいものを使い、頭と腹をとり、塩をして二、三日涼しいところにおく。その魚を、朝晩水をとりかえて、五日から一週間くらい水出しをする。これ

は塩分を抜くばかりでなく、魚の血抜きをするため、この作業を十分にしないと食中毒をおこすことがあるので注意が必要である…〔中略〕…そんなことから、ますなどの塩魚で漬けこむよりは手間がかかるが、味が淡泊で野菜類とのなじみもよく、とてもおいしい飯ずしができるのである。少し早めにとれるはたはたにきつく塩をしておいて、それを使った漬ける人もいる。」なお、成瀬宇平『47都道府県・魚食文化百科』（丸善出版、2011）によれば、ハタハタの飯ずしは北陸地方・新潟県の郷土料理として紹介されている。なお、北海道の郷土料理として、同書では「さけずし」が以下のように紹介されている。「釧路地方の古式豊かな馴れずし。サケの馴れずし、あるいはサケの飯ずしともいう。釧路地方の郷土料理としてのさけずしは、新巻のベニザケを使った。この馴れずしは、サケの薄く切った身・ニンジン・ダイコン・カブ・キュウリ・レンコン・食用菊を一段ずつ並べ、麴を混ぜ、酒・みりん・酢で調味しながら、重石をのせて、冬は約1カ月間漬ける。盛り付けにイクラをのせる。」

註11 サケの飯ずしについて、村元直人『北海道の食』（幻洋社、2000）は、「太平洋沿岸、オホーツク沿岸の漁村ではサケのいずしをつくった。もちろん、今でもつくるが、サケのいずしは高級品になっている」という。越野武ほか『北の生活文庫5 北海道の衣食と住まい』（北海道、1997）では、「近世松前地の食習」として「鮭の飯鮓は松前の正月には欠かせないもの」と、淡齋如水の『松前方言考』から「正月ニ至り取出シテ之ヲ食フ甚ダ美（味）ナリ」との記述を引用している。

註12 農協系のスーパーマーケットだったエコープうらほろ店。浦幌町字新町の農協本所に隣接して店舗を構えていた。1969（昭和44）年に浦幌農業協同組合の直営店舗「くみあいストア」として開業。1999年から関連会社のエコープ道東、2008年からホクレン商事の経営となり、2022年2月に閉店した。

註13 2013-14年にかけて調査された宮崎早花ほか（「北海道の家庭料理：地域の特徴」『日本調理科学会大会研究発表要旨集』33、2022）では、「正月料理を大晦日に年取り膳として食べる家庭が多かった」と報告している。

註14 小千谷（おぢや）。新潟県小千谷市。中越地方に位置し、越後平野の信濃川河岸段丘を中心に発展して

きた。

註15 北海道の浄土真宗に関する正月風習の特徴として、小田嶋政子『北の生活文庫6北海道の年中行事』（北海道、1996）には、しめ縄に関する次のような記述がある。「北海道の門徒（浄土真宗）の家々では注連縄を張る習わしは希薄である。札幌市に住む初山別村出身の渡邊滋（昭和5・1930生まれ）は、昔は注連縄を張っていなかったと、富山県出身者が多い初山別村有明の習俗を語っている。この習わしは富山県や石川県の北陸門徒の家には注連縄を張る習慣がなかったことによる。栗沢町砺波は富山県西礪波郡福光町を中心とする地域からの移住者が多かったこともあって、注連縄を張る習慣はなかったが、近年では周辺地域からの影響を受けて注連縄を張る家が増えているという」。

註16 オホーツク地方の常呂郡佐呂間町栄地区。佐呂間川の上流で、遠軽町と美幌町を結ぶ国道333号線沿いに位置する。

註17 2013-14年にかけて調査された宮崎早花ほか（『北海道の家庭料理：地域の特徴』『日本調理科学会大会研究発表要旨集』33、2022）では、「雑煮は、一般的には醤油味に角餅が多いが、味噌仕立てや餡入り丸餅などもみられ北海道入植者が故郷の味を受け継いでいる様子が窺えた」と報告している。

註18 日本かまぼこ協会によると、「つと」は「蒸しかまぼこ」の一種である「簀巻き（すまき）かまぼこ」に、「なると」は「ゆでかまぼこ」に、それぞれ分類される。「つと」の含まれる簀巻きかまぼこは中国・四国地方の特産とされ、地域により「つと巻」など呼ばれるという。日本かまぼこ協会「かまぼこ製品図鑑」<https://www.nikkama.jp/zukan/>（2022年12月10日閲覧）また、島根県の簀巻きかまぼこ製造の老舗である上野蒲鉾店は、簀巻きかまぼこについて「エソ、トラハゼなどの地魚の生すり身やスケトウダラ等の冷凍すり身を筒状に成形し、その周りに定寸の麦藁（ストロー）を均一につけて蒸した製品」であり、「表面には波形が付き、独特の弾力と魚の旨味を生かすためにやや塩味がかかっているのが特徴」という。主力生産地は四国の今治市や中国地方であるとする。「地域によっては『つと巻』と呼ばれて」おり、「多くの古い書物に、『つとかまぼこ』の名が残っており、『苞（つと）』は麦わらのことではないか」と解釈されているという。上野屋蒲鉾店「かまぼこの歴史と種類」<https://e-sutokama.com/kamaboko-type>（2023

年2月1日閲覧）

註19 浦幌町字常室と炭山との位置する浦幌町の集落。道道500号線（音別浦幌線）の浦幌側沿いに位置する。1945（昭和20）年から1969（昭和44）年まで上常室小学校（通称、福山小学校）が置かれていた。

註20 浦幌町吉野に位置する天理教上吉野分教会のこと。なお、吉野地区を含め、下浦幌地区の神社全体の管理は、現在、天理教上吉野分教会が分担している。

註21 戦前は麻で作るのが一般的だったとも言われている。なお、宮崎清『ものと人間の文化史55-I 藁I』（法政大学出版局、1985）は、「非ワラの文化」のひとつとして、「湿原地型」の例に、千葉県印旛地方および茨城県霞ヶ浦地方のマコモによるワラ人形を挙げている。また、宮崎は同書において『ワラの文化』は……『副産物活用文化』の代表であった。……『非ワラの文化』は、ワラの利用を前提とした稲作文化が定着する以前から、確実に存在していた。そして、特にものづくりにおける『ワラの文化』は、そのような『非ワラ』の文化のうえに初めて花開くことができたと考えられる」と述べている。小田嶋政子『北の生活文庫6北海道の年中行事』（北海道、1996）は、「近年は稲藁が入手しにくくなり、夏にスゲや藨草（イグサ）を採って陰干ししておくといつまでも色が青いので、スゲや藨草を用いる地域が増えている。長く纏った縄を『トシナ』『オシメ』『シメナワ』などと呼び、輪に纏ったものは『ワジメ』『ワトシナワ』『ワサガリ』などと呼ばれている。北海道の注連縄飾りは、出身母村や地域によって実にさまざまな飾り方や名称がある」と述べている。註18の松前地方のしめ縄の事例とも併せて考えると、北海道、特に稲作の定着が著しく遅れ、また衰退した道東地方においては、すでに成立していた「ワラの文化」の代償として「非ワラの文化」を築いたという文化の逆進性が推察される。

註22 小田嶋政子『北の生活文庫6北海道の年中行事』（北海道、1996）は次のように記述している。「北海道では、玄関の両わきに飾る松をカドマツと呼び、トドマツやアカマツの枝を近くの山林から採ってきて飾っている。松を採る日に特に決まりはないが、餅つきと同様に大安などの吉日を選んで山に入ったという人もいる。カドマツは50cmから1mくらいの形の良い松の中央にミカンをつけ、下は水引で縛り、玄関の両側に飾る」。

註23 関沢まゆみ編『日本の食文化6菓子と果物』（吉川

弘文館、2019)では「みかんは年中行事などで利用することがある。このうち最も全国的に広がっているのは正月にみかんを飾る習俗であろう。玄関に飾るしめ縄にみかん類をつけたり、床の間や神棚に供える鏡餅にみかん類を載せることがある…〔中略〕…子孫繁栄のために種のあるみかんを供えるという。また、橙(だいだい)は「代々」に通じるということで、ごろ合わせの意味もあった」と記述している。

註24 関沢まゆみ編『日本の食文化6菓子と果物』(吉川弘文館、2019)は、日本の食生活全集編集委員会編『日本の食生活全集』(1984-93)にもとづき、「昭和初期には、北海道・東北などのみかんが育たない地域でも、みかんを購入して食べている」と記述していることから、座談会出席者の世代では、北海道でもみかんは珍しくなかったと言える。

註25 1間は6尺。約1.82m。

註26 紙垂(しで)。御幣の一種。「四手とも書き、しめ縄には4本垂らすのが一般的」(鈴木安一郎・安藤健浩『しめ飾り 造形とその技法』誠文堂新光社、2019)。

註27 しめ縄については、高倉新一郎『日本の民俗1北海道』(第一法規、1974)に次のような道南・松前地方に関する記述がみられる。「今日北海道では枝松を一對門に打ちつけ、その間にしめ縄を張る家が多いが松前ではカドマツを立てる家はすくなかった。入口の左右の柱に雄蝶・雌蝶の折り紙で根元をくるんだ松の小枝を打ちつけ、これにゆずりはを添え、紅白の水引で結び、しめ縄を張り渡す。このしめ縄をトシナと呼んだ。年縄の略である。これに紙のシデや昆布やすめるめを細く切ったものを下げる。トシナの材料である藁は、松前では津軽船にたのんで長い藁をもらいしまっておき、その便のない所では谷地に生えている菅をとっておき、また米俵を解いた藁を使った。」道東では、これらから発展した独自の風習があるのかもしれない。

註28 『トウガラシの文化史』アマル・ナージ著、林真理・奥田祐子・山本紀夫訳、1997年、晶文社

註29 「ローソクもらい」「ローソク出せ」などとよばれる子どもの行事。小田嶋政子『北の生活文庫6北海道の年中行事』(北海道、1996)では「ローソクもらい」として記述している。同書では、札幌市中島公園、函館、古平町、天塩町、遠別町、小樽市から具体的事例が記載されているほか、「ローソクもらいの分布」として全道分布図が掲載されている。注目すべきは、

この分布図では全道で十勝地方のみ全域空白となっていることである。座談会席上で円子氏が「炭鉱ではやっていた」というのは、浦幌炭鉱が尺別炭鉱を介して「ローソクもらい」を実施していた釧路地方との文化的繋がりが深かったことによるものと推察される(註28参照)。同書では、本州の事例として秋田県と新潟県の事例を紹介しているが、「全国的にはこのローソクもらいの習わしを行う地域は少ない」と述べている。

註30 浦幌炭鉱(1918-54年操業)年と尺別炭鉱(1918-54年操業)のこと。釧路炭田の西部に位置する白糠丘陵には、かつて炭鉱がいくつも存在したが、浦幌周辺では釧路国境山地を東西に接する形で、浦幌炭鉱と尺別炭鉱が存在した。1942年に両鉱は坑内軌道を有する「尺浦隧道」によって結ばれ、尺別炭鉱側には国鉄尺別駅まで通じていた尺別鉄道が連絡しており、浦幌炭鉱出炭分も含めて釧路港まで輸送されていた。浦幌炭鉱は平林甚助の大和鉱業、尺別炭鉱は椎葉紀義の北日本鉱業により開坑したが、最終的には三菱系の雄別炭礦鉄道による経営となって歴史を終えた。円子氏は閉山後の浦幌炭鉱と操業中の尺別炭鉱の両地区で過ごした経験を持つ。

註31 雨竜郡幌加内町。開町以来空知管内だったが、2010(平成22)年に上川管内へ移管された。

註32 “すあま”には、由来の異なる「すはま(州浜)」と「すあま(素甘)」があり、類似のものとして併せて紹介されることもあるが、文献上は「すはま(州浜)」が記載されることが多く、「すあま(素甘)」に言及した資料は少ない。ここで述べているのは「すあま(素甘)」で、「上新粉を用いたもち状の和菓子で、幕末に創作される。紅白の鶴の子・鳥の子もちで祝いに用いる」とされる(岡田哲編『たべもの起源事典』東京堂出版、2004)。地域差については不明で、全国各地の「おやつ」を調べた2017年の『日本調理科学会大会研究発表要旨集』によると、愛知県と滋賀県のおやつに類似の食物として“ういろう”が挙げられているが“すあま”の記述はいずれの都府県にも見られない(西堀すき江ほか「愛知県の家庭料理 おやつの特徴-大都会名古屋、豊かな農村地帯、海岸地帯、山深い里のおやつ」ほか、『日本調理科学会大会研究発表要旨集』第29号、2017.による)。

註33 「御斎(おとき)」。法事や法要が終わったあとに出される会食のこと。

註34 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的

流行による行動規制のこと。病院や施設での面会の
禁止や、飲食を共にすることの制限などがあった。

度尚「^(加筆)價格壹円ニ候条」其ノ他希望ニモ候ハ、部数取纏メノ上四月十五日迄ニ当场宛申込相成度候也

大正十五年 四月 一日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 ^(紫タシテ)「大正拾五年四月 貳日」淨書 校合

村長 ^(印) 首席 ^(印) 合議
番號 一、〇〇九 號 發信者 ^(加筆)「村長」 主任 發議者

宛 名 「^(前除)各學校長」各青年分団長 宛

件 名 實業讀本購讀二千スル件

日本評論社發行ニ係ル「^(加筆)實業同志會會長」武藤山治著『實業讀本』ハ現下國民精神ノ振興ト青年ノ指導上好恰ノモノト被認候「^(前除)購求讀候様致度希望部数取纏メノ上來ル四月十五日迄ニ当场宛申込相成度及候他」^(加筆)「貴分団備品トシテ是非一本ヲ備ヘラレ度候也」

追而定價ハ金壹円「^(前除)ニツキ申添候」ニ有之一般ニモ御勧誘ノ上希望部数取纏メ「^(前除)ノ上」來ル四月十五日迄ニ当场宛申込相成度申添候

大正十五年 三月二十九日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 大正 年 月 日 淨書 校合

村長 ^(印) 首席 ^(印) 合議
番號 一、〇二四 號 發信者 ^(加筆)「青年団長」 主任 發議者

宛 名 東京市芝区白金三光町五四一番地 清岡 邦之助 宛

件 名

拝啓 春暖之候益々御清穆之段奉慶賀候 陳者今般日本評論社ヲ通シテ『實業讀本』御寄贈ニ相成正ニ拝受仕リ現下國民精神ノ振興ト青年ノ指導誘掖上欠クベカラザル唯一ノ伴呂ト奉存候
以テ道德ノ規範トシ貴下「^(加筆)御」惠贈ノ意ニ添ヒ可申右不取敢謝辭申上度如斯御座候

三月二十九日

清岡 邦之助 殿

浦幌村青年團長 石原 重方

敬具

拝啓

去る四月二日附を以て御申越し相成り候 實業讀本購讀方勸誘の件は尚至誠分團に於ては先日來より實業讀本の眞價を認め分團員に對し出來得る限り購讀方勸誘仕おり候処今日までには十五、六名購讀致し居り候間右様の次第御了知相成度此段御通知相申上候

四月十四日

至誠青年分團長

小林 吾作

浦幌村長 石原 重方 殿

第四二號

〔(紫スタンプ)受付印有〕

大正十五年四月十三日

留真青年分團長

岡田

将

北海道十勝郡浦幌青年留真分團長印

浦幌村長 石原 重方 殿

實業讀本購讀二千スル件

本月二日附浦第一〇〇九號ヲ以テ御照會相成候旨題ノ件左記ノ通り及回
答候也

記

希望數

壹部

①

大正十五年四月五日

〔(紫スタンプ)受付印有〕

幾千世青年分團長 千葉 諱之助 ①

浦幌村長 石原 重方 殿

第一、〇〇九號御照會ノ実業学校讀本購讀二千スル件ソレゾレ勸誘候モ目下希望者無之付此段回報候也

大正十五年 四月 一日發議 大正 年 月 日議決 (紫スタンプ)「大正拾五年四月 貳日」淨書 校合

村長 ① 首席 ① 合議

番號 一、〇〇九 號 發信者

〔(加筆)村長〕

主任 發議者

宛 名 各實業補習學校長 宛

件 名 實業讀本購讀二千スル件

日本評論社發行二係ル實業同志會會長武藤山治著「實業讀本」ハ現下國民精神ノ振興ト青年ノ指導上好恰ノモノト被認候條貴校参考書トシテ購求致

小學校教員試験検定ニ関スル件

本年度春季小學校教員試験検定ハ五月二十五日(小學校専科正教員ハ五月二十八日)ヨリ施行相成ヘキ旨本月二十六日付告示相成候処此際無資格者ハ左記ニヨリ奮テ應試スヘキ様「御勧誘相成度旨貴部内各小學校長ニ対シ御通知相成度及通牒候也」其ノ節ヨリ申越ノ次第モ有之候条夫々御勧誘相成度」

追テ准教員及幼稚園保母、試験検定ハ今回施行セサル旨「二付」併セテ御通知相成度」申添候

左記

一、願書添付書類中本道小學校教員ノ職ニアルモノハ身元証明書、身体検査書ヲ要セス

一、願書ハ四月二十五日迄ニ受験セムントスル支廳ニ差出スコト

右差出期限後ノ出願ハ受理セス

村長	首席	合議	主任
印	印		印

決裁印

完結票

村長	首席	主任	施行	完結
印	印	印	済	

枠は朱欄外

第三六號

第四号

大正十五年四月六日

印

浦幌村長 石原 重方 殿
活平尋常小学校長 和市 貞松

北海道十勝郡公立活平尋常小學校長印

完結票

実業読本購読ニ干スル件

本月一日付浦第一〇〇九号御照會ノ件ニ就テハ曩ニ評論社ヨリ直接送本致シ分團員ハ各自ニテ購読致スコト、相成ニ付右御了知相成度此段及回答候也

完結票

村長	首席	主任	施行	完結
印	印	印	済	

完結票

村長	①
首席	①
主任	①
施行	①
結	①

教第二八一號

大正十五年三月二十九日

〔受付印有〕

各町村長 殿

河西支廳長 那須 正夫

學校ニ於ケル齒科医ニ関スル件

調査上必要有之候趣ヲ以テ其ノ筋ヨリノ照会越候條貴部内公私立學校ニ於
 テ齒科医（身体検査等ノ場合ニ臨時囑託セルモノヲ含マス）ヲ設置セルモ
 ノアラハ左記要項ニ依リ設置別ニ調査ノ上四月十日迄ニ無相違當廳ニ到達
 スル様御回報相成度

追テ本文期日迄御回報無之向ハ該当事項ナキモノトシテ処理可致候條御
 承知相成度申添候

左 記

- 一、設置者（市町村、學校、團體等）
- 一、始メテ設置セル年月
- 一、大正十四年度經費豫算
- 一、學校ニ於ケル齒科医執務ニ関スル規程
- 一、學校ニ於ケル齒科医執務ノ狀況（執務報告アラハ添付ノコト無キ場合
 ハ検査、診療衛生訓練等學校齒科ニ関スル執務ノ狀況ヲ記載ノコト）
- 一、大正十四年度ニ於ケル医科診療ノ概要
- 一、其ノ他参考トナルヘキ研究、調査事項

◎ 尚調書用紙ハ美濃紙ヲ用ヒ公文ト調査トハ用紙ニセラレ正副式通御提
 出相成度候

枠は朱欄外

第 三五 號

決

〔浦第一、〇四〇號〕

〔受付印有〕

印 裁

教第二八〇號

〔四月六日〕

①

大正十五年三月二十九日

完

〔浦幌村長〕

印 結

〔各小学校長 殿〕

各町村長 殿

河西支廳長 那須 正夫

各町村長 殿

小學校教員住宅費補助申請ノ件

市區町村立小學校教員住宅費補助金交付ニ関スル規則第三條ニ依リ大正十四年度ニ於テ補助ヲ受ケムトスル向キニシテ申請未済ノモノ有之候ハ、本月二十五日迄ニ当廳ニ到達候様提出相成度此段及通牒候也

追而右期日迄ニ到達セサルトキハ申請ナキモノトシテ其ノ筋ニ申達スヘクニ付御了知相成度為念申添ヘ候

枠は朱欄外

第 三三三 號

浦發第四號
大正十五年四月三日

印

浦幌尋常高等小學校長 成田 惣八郎

北海道十勝郡公立浦幌尋常高等小學校長之印

浦幌村長 石原 重方 殿

教員宿所ニ關スル件

完 (欄外)

本校訓導府録幸平當校宿直室ニ居住仕リ候間此段及報告候也

完結票

村長 印
首席 印
主任 印
施行
完結濟

枠は朱欄外

第 三三四 號

大正十五年 四月 六日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 (兼スタンプ) 「大正拾五年四月 六日」 淨書印校合印

村長 印 首席 印 合議 主任 (加筆) 發議者 印

番號 一、〇二四 號 發信者 「浦幌村長」

宛名 河西支廳長 宛

件名 學校ニ於ケル齒科医ニ關スル件

三月二十九日付教第二八一號ヲ以テ御照會ニ係ル標記ノ件該當事項無之候条御了知相成度及御回答候也

科 目	豫 算 額	附 記
第五款地方費補助	六八三	
第二項教育費補助	五九三	教員住宅料三百九十六円ニ対スル半額金百九十八円 特別教育規程ニ依ル尋常小学校教員俸給補助金四十円 実業補習学校俸給及手当壹千六拾五円ニ対スル三分一補助金金三百五十五円
第四款教育費	三六、九一四	
第二項雜給	四、四八一	
四目教員住宅料	三九六	月五円六人十二ヶ月分此金三百六十円 月三円一人十二ヶ月分此金三十六円

浦幌村大正十三年度教員住宅料歳入歳出決算調書

科 目	豫 算 額	附 記
教員住宅料	九〇〇	
地方費補助	一三〇	
教員住宅料	一六六	
地方費補助	一三〇	

教第一、一一九號
 大正十四年五月十八日
 「^(紫スタンプ)受付印有」

河西支廳長 那須 正夫

内教第六六四號 指令

㊟

〔十勝〕郡〔浦幌村〕

大正十四年度小學校教員住宅料ニ對シ金〔八〕圓ヲ補助ス

大正十五年三月九日

北海道廳長官 中川 健藏

北海道
廳長官
之印

第一四一三號

大正十四年五月十五日

浦幌村長 石原 重方

河西支廳長 那須 正夫 殿

決(欄外)裁 印 小學校教員住宅補助申請ニ干スル件

市区町村小學校教員住宅費補助金交付ニ干スル規則第三条ニ依ル本件別紙ノ通り提出候条可然御取計相成度候也

決裁印

任主	議合	席首	長村
	㊟	㊟	㊟

小學校教員住宅費補助申請

大正十四年度教員住宅料ノ内へ左記ノ通り補助相成度別紙關係書相添へ此段申請候也

大正十四年五月十五日

浦幌村長 石原 重方

北海道廳長官 土岐 嘉平 殿

記

一、金 百九拾八円也

浦幌村大正十四年度歳入歳出豫算書抄本

歳入

右之通相違無之候也

大正十五年四月一日

十勝郡浦幌村長 石原 重方

〔浦幌村長 殿〕
(加筆)

河西支廳長 那須 正夫

内教第六六四號指令

十勝郡浦幌村

大正十四年度小學校教員住宅料ニ對シ金八圓ヲ補助ス

記

大正十五年三月九日

北海道廳長官 中川 健藏

手書き
印

大正十四年度小學校教員住宅設備費(住宅賃借料)

右謄本也

大正十五年四月一日

十勝郡浦幌村長 石原 重方 印

(住宅料) 支出実額調

科 目	豫 算 額	支 出 實 額	備 考
	円	円	

右之通相違無之候也

大正十五年 月 日

町 村 長 氏 名

印

教第二〇一號 印

大正十五年三月十日

印

〔受付印有〕
(紫スタンプ)

印

完結票

村長	首席	主任	施行	完結
印	印	印	濟	結

枠は朱欄外

第 三二一 號

大正十五年 四月 一日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決 (紫スタンプ) 「大正拾五年四月 壹日」 淨書 校印

完結票 (欄外)

村長 印 首席 印 合議 印 主任 發議者 印

番號 七六三 號 發信者 「浦幌村長」 (加筆)

宛名 河西支廳長 宛

件名 大正一四年度小學校教員住宅料補助ノ件

標記ノ件別紙ノ通り請求書提出致候条可然御取計相成度候也

大正十五年一月十四日収入済

完結票

村長	首席	主任	施行	完結
印	印	印	濟	結

請求書

一、金 八圓也

但シ大正十五年三月九日付内教第六六四號ヲ以テ御指令ニ係ル大正十四年度小學校教員住宅料ニ対スル補助金 右及請求候也

大正十五年四月一日

北海道廳長官 中川 健藏 殿

十勝郡浦幌村長 石原 重方

大正十四年度小學校教員住宅料支出額調書

科目	豫算額	支出実額	備考
教員住宅料	三九六 〇〇〇 円	二三三 八〇〇 円	

添候

記

一、學校名

二、全児童数（男女別ニ記入ノコト）

三、特別學級ニ編入セル児童数（男女別ニ記入ノコト）

四、児童選擇ノ方法

1、學業成績ニヨル方法

2、精神検査ニヨル方法

3、身体検査ニヨル方法

4、其ノ他ノ方法（以上ノ1、2、3ノ内ニ或ハ

三ヲ併用セルモノ、其ノ他ヲ含ム）

五、編制方法及學級担任教員

學年	在籍児童数		担任教員職氏名	全上教員ノ經驗趣味等
	男	女		
	計			

注意 無學年級組織ノモノハ學年ノ欄ニ無學年ト記入ノコト

六、教科及教材ノ取扱法

七、効果ノ概要

(イ) 精神ニ及ホセル影響

(ロ) 身体ニ及ホセル影響

(ハ) 學業成績ニ及ホセル影響

八、其ノ他参考トナルヘキ研究調査事項

梓は朱欄外

第 三 二 號

教第二七八號 ⑩

大正十五年三月二十九日

〔受付印有〕

加西支廳長 那須 正夫

〔浦幌町長 殿〕

市町村義務教育費国庫負担法第五條ニ依ル大正十四年度特別町村
交付金ノ件

完 (欄外)
結 市町村義務教育費国庫負担法第五條ニ依リ貴村ニ対シ大正十四年
票 度交付金額左記ノ通決定相成候旨其ノ筋ヨリ通牒有之候ニ付御承
知相成度及通牒候也追テ金券ハ不日其ノ筋ヨリ直接交付可相成候
ニ付御了知相成度申添候

左記

郡 村 名 交 付 金 額

十勝郡浦幌村 三、二二一円

拝啓来る廿三日午前九時半より當校児童青年卒業証書并ニ修業証書授與式
挙行可致候間御繰り合せ御臨席の榮を得度此段及御案内候也

尚式後児童青年の学藝会開催可致候間引続き御高覧願上候

大正十五年三月七日

留真尋常小学校長 花見 八百三

北海道十勝郡
公立留真尋常
小学校長印

石原 重方 殿

第 三 〇 號

枠は朱欄外

大正十五年 三月二十六日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決(紫スタンプ)「大正十五年參月廿六日」發送 淨書(印) 校合(印)

村長 (印) 首席 (印) 合議 主任 發議者 (印)
番 號 浦第 九 一 七 號 發信者 「浦幌村長」(加筆)

宛 名 河西支廳長 宛
件 名 特別學級ニ關スル件

票 結 教第二三九號ヲ以テ御照会相成候標記ノ件該当事項無之候

完結票

村長 (印) 首席 主任 (印) 施行濟 (印) 完結

教第二三九號 (印)

大正十五年三月二十三日

「受付印有」(紫スタンプ)

各町村長 殿

特別學級ニ關スル件

河西支廳長 那須 正夫

調査上必要有之候条貴部内小學校ニ於ケル(四月一日現在調査)特別學級
(補助學級、促進學級等其ノ名称ノ如何ニ拘ラス劣等児ヲ以テ編制セル學
級)ニ關シ左記事項御取調ノ上四月十日限り御回報相成度

追而報告無之向ハ施設事項ナキモノトシテ処理可致ニ付御了知相成度申

第一三号

〔(紫スタンプ)受付印有〕

大正十五年三月十四日 貴老路尋常小学校長

北海道十勝郡公立貴老路尋常小学校長印

浦幌村長 殿

⑨

上浦幌方面卒業式日割ノ件

上浦幌方面卒業式左記日割ノ通り挙行致候條萬障御差練御臨席被下度候也

記

三月	二十日	上浦幌尋高小学校
〃	二十二日	貴老路尋常小学校
〃	二十三日	川上尋常小学校
〃	二十四日	川流布
〃		活平

第五二八號

〔(紫スタンプ)受付印有〕

⑨

大正拾五年三月十六日

十勝郡川流布尋常小学校 桑原 藤一

北海道十勝郡公立川流布尋常小学校長印

浦幌村長 石原 重方 殿

卒業証書及修業証書授與式挙行ノ件

本月二十三日第拾五回卒業証書及修業証書授與式午前九時ヨリ挙行致候條御練合御臨席相成度右及御案内候也

追テ當日式後各学年兒童學藝會挙行ノ筈ニ候ヘバ是非御臨席相成度申添候

⑨

大正十五年三月十五日

〔(紫スタンプ)受付印有〕

十勝郡上浦幌尋常高等小学校長 成田 順治

殿

肅啓 時下陽春の候尊体愈ニ御清適この段奉欣賀候陳者来ル二十四日午前九時ヨリ当校卒業証書授與式挙行仕リ候間萬障御差練の上是非臨席の榮を賜り度此の段ご案内候也 右御案内まで

三月十五日

上浦幌尋常高等小学校長 成田 順治

浦幌村長 石原 重方 殿

完結票

村長	首席	主任	施行	完結
印	印	印	印	

印

〔受付印有〕

拝啓春和の候愈々御清穆の候奉賀候然者
来ル三月二十三日午前九時より本校卒業証書授与式挙行致すべく
候条御賁臨之榮を賜はり度此段御案内申上候 敬具

大正十五年三月十八日

川上尋常小学校長 蕨田 新助

浦幌村長 石原 重方 殿
御侍史

印

〔受付印有〕

印

拝啓

来ル二十二日午前九時ヨリ當校第四回卒業証書授與式並ニ式後
成子親王御生誕記念處女會創立致可候間悪路御難渋ノ事ニ候ヘ共
御光臨ノ榮ヲ得度此段及御案内候也

三月十九日

常盤尋常小学校長 眞壁 林之助

浦幌村長

石原 重方 殿

印

印

〔受付印有〕

拝啓
来ル二十二日午前九時ヨリ當校第二回卒業証書授與式挙行致候ニ
付萬障御繰合セ御臨席相成度此段御案内申上候也

大正十五年三月十八日

幾千世尋常小学校長 千葉 諫之助

浦幌村長 石原 重方 殿

印

北海道十勝郡 公立幾千世尋 常小学校長印

北海道十勝郡 公立常盤 小学校長印

枠は朱欄外

第^朱二^黒八^朱號

教第二一〇號

〔三月十六日〕

大正十五年三月十二日

印

印

〔浦幌村長〕

河西支廳長

那須 正夫

〔各小学校長殿〕

各町 村 長 殿

汽車通学生取締二千スル件

票 結 完^(欄外) 印 裁 決^(欄外)

近來学校生徒児童ニシテ汽車若クハ電車ニ依リ通学ヲナスモノ暫時増加シ来候處是等ニ對シテハ既ニ各校ニ於テ夫々乗降車及車内ニ於ケル心得等ニ付深ク注意シツ、アルコト、ハ被存候共尚ホ往々ニシテ列車進行中墜落死ノ不幸ヲ見延テ鉄道乗務員ニ多大ノ迷惑ヲ掛クルカ如キ事例アルハ甚ク遺憾ノ次第二有之候右ハ畢竟日々乗車ヲ繰返ス結果自然危険ヲ感知セサルニ至リ若ハ乗車中ノ心得ヲ失念シ輕率ナル行動ニ出ツルニ因ルモノト認メラレ候条爾今之カ取締ニ関シテハ保護者ニ對シテ特ニ注意ヲ促スハ勿論或ハ学校職員ニ於テ時々生徒児童ノ往返ヲ實地ニ視察監督シ或ハ鉄道當事者トノ連絡ヲ一層緊密ニスル等適切ナル方法ヲ講シ事故ヲ未然ニ止スル様〔此旨部内各小学校長、御傳達相成度〕

〔致度旨其筋ヨリ通牒有之候条此段及移牒候也〕
決裁印

任 主	議 合	席 首	長 村
印		印	印

完結票

完 結	施 行	主 任	首 席	村 長
	濟	印	印	印

枠は朱欄外

第^朱二^黒九^朱號

大正十五年三月十七日

養老尋常小學校長

荒木 唯見

票 結 完^(欄外)

浦幌村長 石原 重方 殿

卒業証書授與ニ關スル件

來ル本月廿三日午前九時ヨリ第十三回卒業証書授與式挙行政致候間御臨席相成度此段御案内申上候也

北海道十勝郡公立養老尋常小學校長印

枠は朱欄外

第 一 二 七 號

大正十五年 三月一六日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決〔大正十五年參月拾六日〕發送 淨書 校合

村長 ① 首席 ① 合議 主任 發議者 ①

番 號 浦第 七七四 號 發信者 〔浦幌村長〕

宛 名 河西支廳長 宛

件 名 旧土人兒童就学調査ノ件

教第二〇八號ヲ以テ御照会有之候標記ノ件該当事項無之候

完結票

村長 ① 首席 ① 主任 ① 施行 ① 完結

教第二〇八號

大正十五年三月十二日

各町村長 殿

旧土人兒童就学調査ノ件

調査上必要有之候条貴部内小学校中左記事項付ヲ三月十日現在ニテ御調査ノ上本月廿五日迄ニ回答相成度

追テ該當事項無之候ハ、其旨回答有之度

旧土人兒童收容調

學校名	大正十五年	度經常	部予算	円	兒童數	内 旧 土 人 兒 童 數					合 計		
						一 尋	二 全	三 全	四 全	五 全		六 全	計 高
					女 男								

〔翻刻者注 最下段の欄に「大正十五年四月ニ入学セシムルヘキ土人兒童見込人員」の文字が入る〕

大正十五年 一月二八日發議 大正 〳年 〳月 〳日議決〔紫スタンプ〕大正拾五年壹月 卅日〕發送 淨書 校合

村長 ① 首席 合議 主任 發議者 ①

番號 浦第 一七一 號 發信者 「浦幌村長」〔加筆〕

宛 名 各小学校長 宛

件 名 優良児童表彰ニ關スル件

来ル三月下旬十勝教育会ニ於テ左記標準ニ依リ管内小学校優良児童表彰可致趣ヲ以テ右候補者推薦方申来リ候条来ル二月五日迄当役場ニ到達スル様御報告相成度及御照會候也

追テ表彰記念品注文ノ都合有之趣ニ付右記期限相違無之様致度期日迄ニ到着ナキ向ハ該當者ナキモノト認メ處理致申添候

記

支廳ヨリ来書ノ左記全文謄写ノ事

但シ 〔朱筆〕 〔朱筆〕内ヲ除ク

大正十五年一月十五日 ①

各町村長 殿 十勝教育会長 那須 正夫

優良児童表彰ニ關スル件

来ル三月下旬本会ニ於テ左記標準ニヨリ管内小学校優良児童表彰可致候ニ付貴部内小学校児童中ヨリ右候補者御推薦ノ上来ル二月十日迄本会ニ到着ノ見込ヲ以テ御報告相煩度此段及御依頼候也

追テ表彰記念品注文ノ都合モ有之候条報告期日相違無之願致度申添候也

記

- 一、推薦基準
 - 一、身体強壯操行善良学業優等ノ者
 - 一、尋常科六学年ニ在学シ其校ニ一ヶ年以上在学セルモノ
 - 一、推薦児童数ハ全校児童（特別教授場分校含ム）二百名迄ハ一名二百名ヲ増ス毎二一名宛増加スル事
- 右児童数ハ高等科児童数ヲ含マサルモノトス

〔朱筆〕「何々村」優良児童推薦書

備考 一、学業成績ハ百点法タルコト 一、学業成績ハ尋常六学年第二学期分ヲ記載スルコト「一、児童所属学校名ヲ正確明記スルコト」「一、順位ハ各学校別ニ順位ヲ定ムルコト」

上浦幌 全
 留真尋常小学校
 常室尋常小学校
 貴老路尋常小学校
 川上尋常小学校
 川流布尋常小学校
 稲穂尋常小学校
 活平尋常小学校
 幾千世尋常小学校
 常盤尋常小学校
 吉野尋常小学校

(個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)
 (個人情報により省略)

控 表彰状記念品交付控

浦幌小学校
 上浦幌小学校
 留真小学校
 常室小学校
 貴老路小学校
 川上小学校
 川流布小学校
 稲穂小学校
 活平小学校
 幾千世小学校
 常盤小学校

三月十六日送達

吉野小学校

三月十六日
園田校長渡

決(欄外) 浦第一七一號
 裁 大正十五年二月十日
 印 十勝教育会長 那須 正夫 殿

(紫スタンプ)
 「大正拾五年貳月拾日」

優良児童表彰ニ關スル件

客月十五日付御照会相成候標記ノ件別紙ノ通り推薦致候条可然御取計相成
 度及御回答候也

決裁印

任主	議合	席首	長村
印		印	印

〔翻刻者注…以下、先に翻刻した各小学校からの優良児童の推薦書が綴じ
 られている。ここには推薦児童の氏名、各教科の学業成績、体格、操行の
 項目があり個人情報にあたるためこれを省く〕

本年度翻刻を実施した史料に付される番号および件名は左記の通りである。
文書番号の区切りになる箇所を実線、同じ文書内で照会への返信など作成者・発信者の区別
ができる箇所は破線で示した。

二六	優良児童表彰ニ關スル件
二七	旧土人児童就学調査ノ件
二八	汽車通学取締ニ干スル件
二九	卒業証書授與式挙行ノ件
三〇	特別学級ニスル件
三一	市町村義務教育費國庫負担法第五条ニ依ル大正十四年度特別 町村交付ニ干スル件
三二	大正十四年度小学校教員住宅料補助ノ件
三三	教員住所ニ關スル件
三四	学校ニ於ケル歯科医ニ干スル件
三五	小学校教員試験検定ニ干スル件
三六	実業読本購ニ干スル件

枠は朱欄外

第 一 二 六 號

大正十五年三月十六日發議

大正〃年〃月〃日議決

〔大正拾五年參月拾六日〕發送

村長^印 首席 合議 主任 發議者^印
番號 七七六 號 発信者 村長

宛 名 各小学校長 宛
件 名 優良児童表彰ニ干スル件

十勝教育会ニ於テ貴校左記児童ヲ優良トシテ表彰相成候旨通知有之候条及
御伝候也

追而表彰状記念品ハ別途及送付候条卒業式當日授與相成度候也

記

十勝教育会長ヨリ通知ノ通り

大正十五年三月十二日

十勝教育会長 那須 正夫 ^印

各町村長 殿

優良児童表彰ニ關スル件

貴部内左記児童ヲ優良トシ表彰致シ候條當該学校長ニ其旨御傳相煩度此段
及御依頼候也

追テ表彰状記念品ハ不日別便ヲ以テ送付可致候

記

學 校 名

表彰児童氏名

浦幌尋常高等小学校

(個人情報により省略)
(個人情報により省略)

資料紹介

大正十五年

昭和元年

教育雑件〔その七〕

浦幌村役場

三浦直春・大和田努 解説

本報は、浦幌町立博物館所蔵の「大正十五年 昭和元年 教育雑件」(浦幌村役場) 簿冊に綴られた各文書を翻刻したものである(図1)。
各文書の内容については、冒頭に目録が綴られており、紀要第16号(2016年発行)に掲載してある。本号には目録の文書番号二六から三六までを掲載した。

各文書については、紀要に文書毎に分割して掲載している。なお、掲載の順序は、原則として「教育雑件」に綴られている順序とする。

翻刻は、浦幌町立博物館ボランティアの三浦直春が担当してきたが、三浦が2018年に逝去したため、帯広百年記念館学芸員の大和田努が引き継いだ。



図1 大正十五年 昭和元年 教育雑件(浦幌村役場)

※原資料は浦幌町立博物館で収蔵していますが、資料の劣化防止などのため、展示公開はしていません。調査・研究上の理由で必要な場合には、所定の手続きにより閲覧する事が可能です。原資料の閲覧が必要な場合は、博物館までお問合せ下さい。

〔浦幌町立博物館学芸員〕

浦幌町立博物館

年報



Historical Museum of Urahoro

2021 (令和3) 年度事業報告
(2021.4.1~2022.3.31)

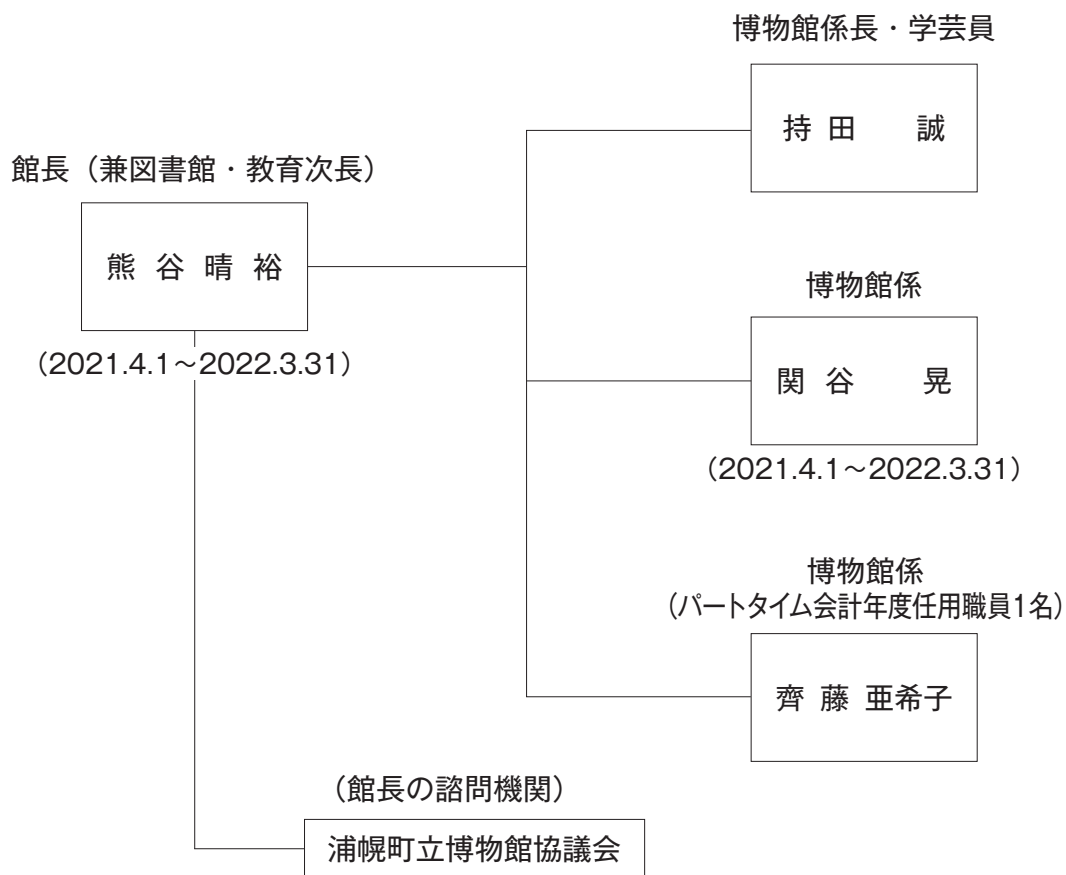
I. 博物館運営方針

令和3年度浦幌町立博物館運営方針

浦幌町の多様な歴史、自然、文化に関する資料と情報を幅広く収集・保全し、地域の財産として将来へ引き継ぎ、多方面で活用していくために、浦幌町立博物館は次のような活動を展開します。

1. 昨年度に引き続き、博物館法の動向や全国の公立博物館の現状を鑑みつつ、これから先の博物館のありようを考えるための連続講座やシンポジウムを開催します。
2. 博物館情報のデジタル化やインターネット対応を進め、ホームページの新規開設と博物館資料データベースの構築を実施します。
3. 町内の文化財情報の発信拠点として、国内外の各種データベースへの情報提供や連携を進めます。
4. 博物館事業の見直しを進め、普及行事や企画展示の回数を減らし、資料の整理・登録作業、調査研究活動など、博物館活動の土台となる作業に活動の主軸を移します。
5. 博物館法にもとづく登録博物館化への検討を進めます。
6. 図書館との複合施設である当館のメリットを活かし、事業やレファレンス、地域資料の収集や、収蔵資料の有効活用、情報発信など、共同で推進できる体制の構築をはかります。
7. 停滞している東山防災倉庫の収蔵資料の搬出や吉野収蔵庫における資料整理活動を進めます。
8. 町内のさまざまな学術資源を、新規に文化財等として指定することを目指した取り組みを進めます。
9. アイヌ振興法の考え方にもとづき、ラポロアイヌネイションやアイヌ民族文化財団と連携して、アイヌ民族の歴史や文化を発信する活動に取り組みます。
10. 「国際博物館の日」や「文化財保護強調月間」「近代化遺産の日」などを軸に、全国の博物館や文化機関と連携した、多様な博物館事業を展開していきます。

II. 博物館の組織



令和3年4月1日現在

職名	氏名	住所	備考
会長	円子 紳一	北栄町2区	
副会長	西森 七枝	新 町	
委員	池田 哲	住吉町1区	浦幌中学校長
〃	横山 利幸	緑 町	浦幌小学校長
〃	春日 基江	北町2区	
〃	坂下 禮子	光 南	
〃	齊藤 絵理佳	南 町	
〃	長谷川 みなみ	厚 内	

(任期 令和3年12月18日まで)

III. 資料の受け入れ

博物館資料の新規受入件数 (2022年3月31日時点) 【2019年より暦年で表示】 (件)

内 訳	2015(平成27)	2016(平成28)	2017(平成29)	2018(平成30)	2019(令和元)	2020(令和2)	2021(令和3)
寄 贈	440	453	466	531	728	588	630
採 集	122	234	357	272	194	346	120
図書資料	533	315	312	291	445	370	468
合 計	1,095	1,002	1,135	1,094	1,367	1,304	1,218

IV. 資料の提供

収蔵資料の利用状況 (2022年3月31日時点) 【年度】 (件)

	2016(平成28)	2017(平成29)	2018(平成30)	2019(令和元)	2020(令和2)	2021(令和3)
特別利用(館外貸し出し)	3	4	1	5	5	8
特別利用(来館調査)	5	5	5	11	9	8
出 版 利 用	4	3	3	5	2	6
合 計	12	12	9	21	16	22

* 博物館活動、博物館紀要における調査研究利用・出版利用、一般報道使用をのぞく

V. 出版・広報活動

- 『浦幌町立博物館年報』第22号発行 (2021年11月30日)
- 『浦幌町立博物館紀要』第22号発行 (2022年3月31日)
 - ・ 論文、資料紹介4編を掲載
 - ・ 第16号より国際逐次刊行物番号 (ISSN) を付与 (ISSN 2189-4787)
 - ・ 年報と共に全国の主な大学、博物館、図書館へ発送。
- 『浦幌町立博物館だより』発行 (毎月1日発行)
 - ・ 町内および十勝・釧路管内の主な博物館、図書館等で配付。PDF版をホームページにて公開。
- 『広報うらほろ』に「博物館の窓」「アシール・レーラ」を連載
- 日本福音ルーテル帯広教会記念誌編集委員会(編)『信仰の灯は永遠に：日本福音ルーテル池田教会と吉田康登牧師の足跡』〔浦幌町立博物館企画展図録〕発行 (2021年4月4日)

VI. レファレンス業務

レファレンス対応状況 (2022年3月31日時点) 【年度】 (件)

	2016(平成28)	2017(平成29)	2018(平成30)	2019(令和元)	2020(令和2)	2021(令和3)
来館・町内呼出によるもの	28	35	55	62	75	59
通信および他部局より転送	102	62	112	78	129	56
合 計	130	97	167	140	204	115

VII. 博物館ボランティア

博物館活動の一環として、博物館ボランティアによる活動がある。博物館ボランティアの業務は、①資料整理等の補助業務 ②新聞資料等の整理 ③博物館図書の登録と整理 ④簡易な展示解説 ⑤調査研究活動の補助 ⑥その他館長が適当と認めた業務等が想定されるが、本館では①～③業務を主に行い、他に古文書解説も行われている。現在の登録者は10名であるが、日常的に活動している者は6名である。

なお、古文書解説の成果は、「浦幌町立博物館紀要」第21号に掲載し第22号では休載した。

VIII. 博物館の利用状況

(1) 博物館入館者の推移

(令和4年3月31日現在)

	2008(平成20)年度		2009(平成21)年度		2010(平成22)年度		2011(平成23)年度		2012(平成24)年度		2013(平成25)年度		2014(平成26)年度	
月	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数
小計	300	8,151	299	7,990	302	8,471	307	10,012	309	9,648	305	10,403	305	10,045
累計	2,777	87,903	3,076	95,893	3,378	104,364	3,685	114,376	3,994	124,024	4,299	134,427	4,604	144,472

	2015(平成27)年度		2016(平成28)年度		2017(平成29)年度		2018(平成30)年度		2020(令和元)年度		2020(令和2)年度		2021(令和3)年度	
月	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数	開館日数	入館者数
4	25	697	26	927	26	603	27	663	26	777	17	419	25	367
5	27	835	25	979	26	806	27	1,045	27	915	14	41	15	226
6	25	1,218	26	661	26	670	26	671	26	696	25	185	8	101
7	27	754	27	897	26	882	26	1,261	26	1,024	27	332	27	417
8	26	1,919	25	1,853	28	1,352	28	1,340	27	919	26	342	25	381
9	26	807	25	903	26	783	25	872	25	783	26	294	0	0
10	27	826	26	472	26	813	27	1,119	26	1,129	26	331	26	345
11	24	958	24	807	25	510	26	692	26	657	23	296	22	298
12	25	576	26	693	26	929	26	595	25	747	26	255	26	315
1	23	701	22	639	23	454	23	799	22	748	22	182	21	243
2	23	1,025	24	900	24	893	24	957	24	629	21	227	22	160
3	27	845	27	587	26	708	26	1,248	12	634	26	389	26	300
小計	305	11,161	303	10,318	308	9,403	311	11,262	292	9,658	279	3,293	243	3,153
累計	4,909	155,633	5,212	165,951	5,520	175,354	5,831	186,616	6,123	196,274	6,402	199,567	6,645	202,720

緊急事態宣言発令に伴う臨時休館 (2021年度は5/19～6/20および8/30～9/29)

(2) 団体入館者 (事前申込みしくは当日解説対応を実施した団体・個人 / 3月末日現在)

4月 6日 学童保育所	41名	10月 28日 上浦幌中央小学校3・4年生	10名
4月 25日 釧路教育大学	5名	10月 30日 北海道中央バス(株)シービーツアーズカンパニー	22名
5月 5日 帯広の森はぐくむボランティアの会	8名	12月 8日 音更町高齢者大学院	24名
5月 8日 鹿追ジオパークビジターセンター	7名	12月 29日 学童保育所	27名
6月 26日 北海道立大学アイヌ・先住民研究センター	15名	1月 7日 学童保育所(図書館にて見学学習「ポプラディアで調べてみよう」実施)	34名
7月 4日 ハハハホステル	17名	1月 27日 浦幌小学校3年生(むかしのくらし授業)	35名
7月 25日 コープさっぼろ	8名	3月 1日 認定こども園(パンダ組)	25名
8月 5日 学童保育所	41名	3月 2日 認定こども園(ウサギ組)	25名
8月 22日 幕別町日新寿会	16名	3月 2日 認定こども園(コアラ組)	23名
8月 24日 常盤なかよし会	18名	3月 29日 認定こども園(バンビ組)	15名
10月 22日 幕別町しらかば大学	20名	合計	22件 456名
10月 25日 新人教職員研修	20名		

(令和4年3月31日現在)

2021（令和3）年度 博物館教育普及事業報告

分類	領域	No.	事業名	事業概要	期 日	来場者または参加者数	備 考
展 示	企画展	1	コロナな時代を語り継ぐために	新型コロナウイルスにより変化した地域の生活を身近な資料で記録する試みです。	2月27日～4月11日	344名 (記帳者のみ)	
		2	アイヌ伝統文化作品展	ラポロアイヌネイション主催のアイヌ刺繍教室の受講生が製作作品を展示。	4月22日～5月23日	204名 (記帳者のみ)	ラポロアイヌネイション共催
		3	ナキウサギ展 2020-2021 まもりたい小さな生命	東十勝に生息するナキウサギの生態や保全上の課題などについて解説。	6月22日～7月25日	330名 (記帳者のみ)	ナキウサギふあんくらぶ共催
		4	紙の宝石 千葉定是の書票 浦幌展	紙の宝石といわれる書票について、千葉定是氏の作品を中心に紹介。	7月31日～9月5日	210名 (記帳者のみ)	浦幌町立博物館・浦幌町立図書館共催
		5	うらほろ亭の思い出	レストラン大和の閉店を記念し、ひとあし先に閉店した系列店「うらほろ亭」の資料を公開。	10月1日～10月24日	282名 (記帳者のみ)	
		6	帯広百年記念館運営連絡協議会移動展「過ぎ去りし街角 荘田喜與志が見た帯広・十勝巡回」	十勝・帯広の昭和を記録した写真家荘田喜與志氏の写真で振り返る十勝の歴史景観。	10月30日～11月16日	122名 (記帳者のみ)	
		7	いろいろな看板展	収蔵資料のなかから「看板」を選んで大集合し、その歴史や役割、多様性を紹介。	12月15日～1月16日	160名 (記帳者のみ)	
		8	トピック展「クリスマスの文化」	日本ではなじみの薄いクリスマスの文化について、旧日本福音ルーテル池田教会の資料を中心に展示。	12月18日～12月30日	未計数	
		9	トピック展「お正月の文化」	お正月にみられる飾り物や料理などについて紹介。	1月8日～2月1日	未計数	
		10	全国孔版画年賀状展	十勝孔版画の会による毎年恒例の孔版画年賀状作品展です。	1月27日～2月8日	73名 (記帳者のみ)	共催：浦幌孔版画サークル
		11	ぼくの、わたしの、書き初め展	書道教室「もみじ子会」に通う子供たちの書き初め作品を展示。	2月12日～24日	118名 (記帳者のみ)	共催：もみじ子会
		12	ひな人形展	収蔵資料のひな人形を公開。	2月27日～3月20日	185名 (記帳者のみ)	
		教育普及	博物館講座 (うらほろスタイル ゼミナール)	13	トピック展「コロナな時代を語り継ぐために2022」	新型コロナウイルスで変化した暮らしの記録。	3月1日～5月8日
14	北海道で初めて確認された水草「トリゲモ」について			2019年に豊頃町の沼で北海道で初めて記録された水草トリゲモの話題を中心に水草の研究や魅力についてお話します。	4月21日	19名	講師：首藤光太郎（北海道大学総合博物館助教）
15	厚内神社の絵馬と神社のあゆみ			厚内神社所蔵の絵馬を通じて、厚内神社の歴史を振り返る。	9月22日	中止	緊急事態宣言発令のため中止
16	「看板」を観察する			企画展「いろいろな看板」で展示されている資料について解説。	12月15日	15名	講師：持田誠学芸員
17	国際博物館の日記念講座「写真・映像に見る1950年代アイヌの踊り」			残された写真から、釧路地方のアイヌ文化を振り返ります。	5月16日	中止	講師：城石梨奈（釧路市立博物館学芸員）/緊急事態宣言発令のため中止
18	企画展関連講演会「水河期からつないできた命へエゾナキウサギの生態と保護」			最近少しずつ解明されつつあるナキウサギの生態と、アメリカや中国のナキウサギを映像で紹介。ナキウサギの保護についても考えていきます。	7月4日	43名	講師：市川利美氏（ナキウサギふあんくらぶ）
19	博物館講座「博物館実習生発表会」			帯広畜産大学から来た3名の博物館実習生が、自分の学んでいる専門分野について、ミニ展示を通じて解説する。	8月6日	13名	講師：博物館実習生（吉川徳恵・小南光・伊藤綾乃）
20	企画展関連講座「書票の愉しみ」			美しく技巧を凝らした書票（蔵書票）の魅力について、製作者の千葉氏が自ら解説。	8月8日	17名	講師：千葉定是氏
21	博物館講座「博物館実習生発表会」			北海道大学から実習にきている大学生が、学んでいる専門分野について解説。	9月18日	中止	講師：博物館実習生（三枝弘典）/緊急事態宣言発令のため中止
22	博物館講座「駐在さんのごと」			浦幌駐在所の駐在さんから、駐在所の日常、仕事内容について解説してもらおう。	10月17日	12名	講師：小笠原真二氏（浦幌駐在所長）
23	国際博物館の日記念講座「写真・映像に見る1950年代アイヌの踊り」	残された写真から、釧路地方のアイヌ文化を振り返ります。	11月6日	15名	講師：城石梨奈（釧路市立博物館学芸員）		

VIII. 博物館の利用状況

分類	領域	No.	事業名	事業概要	期 日	来場者または参加者数	備 考
教育普及	博物館講座 (うらほろスタイル ゼミナール)	24	2021年度北海道民族学会第2回研究会	北海道民族学会公開講座で「浦幌の地理・歴史・博物館の役割」について解説。	11月13日	26名	講師：持田誠学芸員 ほか主催：北海道民族学会
		25	北海道自然史研究会オンライン中継	北海道自然史研究会の研究発表会を博物館ロビーで視聴。オンライン中継で当館からも発表を行った。	2月20日	6名	主催：北海道自然史研究会
		26	『うらほろスタイル』から『地域をともにつくる学校』を学ぶ	なぜ教育大学が浦幌に注目するのか？	3月5日	11名	講師：宮前耕史氏（北海道教育大学浦幌校） ／共催：中央公民館・NPOうらほろスタイルサポート
		27	厚内神社絵馬の文化財指定	浦幌町初の有形文化財に指定された厚内神社の絵馬について解説する。	3月16日	中止	新型コロナウイルス蔓延防止のため6月は中止。
	町民座談会	28	お正月の文化を語ろう	「おせち料理」を中心に、いとむかしのお正月文化の違いなどについて自由に語り合う。	1月13日	6名	話題提供者：古賀詠風氏
	夏休み子ども博物館	29		学童保育所出前授業の実施			
	冬休み子ども博物館	30		学童保育所出前授業の実施			
	移動講座	31	<月例調査観察会> 豊北植物調査会	毎月1回豊北原生花園を歩き、植物のフェノロジー（生物季節観測）を調査・記録する。	5月～11月 毎月1回	29名	新型コロナウイルス蔓延防止のため6月は中止。
		32	<自然観察会> ウラボロイチゲ観察会	日本では浦幌で最初に発見された植物ウラボロイチゲの自生地を巡って観察する講座	4月29日	21名	講師：坂下禮子氏
		33	<自然観察会> 「春の森林公園をあるく」	森林公園の春の植物や動物などを観察します。	5月4日	27名	講師：持田誠学芸員
		34	<自然観察会> 「青い鳥を探そう」	夏鳥オオルリの美しい姿を、木々の葉が茂って観察しづらくなる前の初夏に観察する	5月2日	25名	講師：春日基江氏（トリおばさん）
		35	<移動博物館> 「上浦幌の地形を巡る」	浦幌川の特徴ある地形を、地形図をみながら実際にたどる。今回は上浦幌地区を巡検する。	7月11日	18名	講師：乙幡康之（ひがし大雪自然館学芸員）
		36	<移動博物館> 「ウチダザリガニバスターズ」	特定外来生物ウチダザリガニの捕獲を体験し、生態系について学ぶ。	8月1日	13名	浦幌の自然を楽しむ会共催
		37	<ふるさと探訪> 列車で学ぶ地理・歴史	列車を活用した鉄道遺産と地理歴史巡検	10月23日	23名	北海道文化財保護強調月間/全国近代化遺産一斉公開2021
		38	<自然観察会> 秋の渡り鳥観察会	ハクガン、シジュウカラガン、マガン、ヒシクイなど秋に大終結する渡り鳥を観察する。	11月3日	中止	雨天のため中止
		39	<自然観察会> 春の渡り鳥観察会	ハクガン、シジュウカラガン、マガン、ヒシクイなど秋に大終結する渡り鳥を観察する。	3月26日	10名	予定
	ロビーコンサート	40	中止				
	ラポロアイヌネイション共催	41	「初心者アイヌ文様刺繍講座」	アイヌ文様刺繍について、その独特の技法を伝承者から学ぶ連続講座	不定期		講師 廣川和子ラポロアイヌネイション共催

IX. 学芸員の執筆活動・依頼講演・社会活動等

(1) 共同研究

- 浦幌町内における特定外来生物ウチダザリガニの実態に関する調査（浦幌の自然を楽しむ会）
- 釧勝国境地域の植物相に関する研究（釧路市立博物館）
- 環境省モニタリングサイト1000水生植物調査（環境省、国際湿地保全連合、釧路市立博物館、新潟大学ほか）

(2) 論文・出版（当館紀要への掲載を除く）

- 大澤剛士・三橋弘宗・細矢剛・神保宇嗣・渡辺恭平・持田誠, GBIF日本ノードJBIFの歩みとこれから：日本における生物多様性情報の進むべき方向. 保全生態学研究, 1-15.
- 持田誠・高田祐一, 紀要論文等の書誌情報流通における課題と「文化財論文ナビ」の取組. カレントアウェアネス, 350：1-5.
- 持田誠, 「博物館」と「学芸員」の問題は別々だと痛感した20年. Museum Data, 82：15-20.
- 持田誠, 博物館活動奨励賞受賞に寄せて／地域博物館に学芸員が存在する意味. 博物館研究, 57（3）：23.
- 持田誠, 分科会2「自然史は博物館で生き残れるのか？：標本・人材・文化と自然史. 博物館研究, 57（3）：16-17.
- 持田誠, 十勝地方における自然保護問題の一例. 北海道の自然保護, 60：56-62.
- 持田誠, 地域博物館におけるコロナ関係資料の収集. COVID-19の下で、記録に向き合う：63-74.
- 土田和代・持田誠, 戦前・戦後の国後島および釧路市における生活史の一断面：元郵便局長 土田一雄氏への聞き取り調査記録. 釧路市立博物館紀要, 40：15-24.
- 日本福音ルーテル帯広教会記念誌編集委員会（編）, 信仰の灯は永遠に：日本福音ルーテル池田教会と吉田康登牧師の足跡〔浦幌町立博物館企画展図録〕

(3) 研究発表等

- 2021年9月12日：社会教育における博物館の立ち位置：博物館法改定を見据えて 日本社会教育学会第68回研究大会ラウンドテーブル「社会教育法70年と社会教育法制をめぐる課題（その4）博物館法改正をめぐる（その2）」
- 2021年10月7日：今を集める博物館/全国博物館長会議
- 2021年11月11日：コロナ関係資料の収集と博物館 市民マイスター講座2021
- 2021年11月13日：浦幌の地理・歴史・博物館の役割 北海道民族学会2021年度第2回研究会
- 2021年12月15日：根室本線全通100年で振り返る十勝の鉄道 めむろ柏寿学園講演会
- 2022年2月20日：自然史は博物館で生き残れるのか？全国博物館大会シンポジウムの報告と投げかけられた課題 北海道自然史研究会（オンライン）
- 2022年3月8日：地域博物館におけるコロナ関係資料収集2年目の現状と課題 シンポジウム「コロナ禍と博物館の2年 資料の収集・展示をめぐる課題と展望」（オンライン）

(4) 表彰

- 第69回全国博物館大会（2021年11月17日～18日、札幌市）において博物館活動奨励賞を受賞。
 - ・受賞論考「コロナ関係資料収集の意義と必要性」
 - ・掲載誌『博物館研究』第55巻第11号（2020年）

投稿要領・執筆要領

浦幌町立博物館では、『浦幌町立博物館紀要』への投稿者を募っています。投稿範囲は、浦幌・十勝並びに北海道を含む北方圏に関する論文、短報、資料紹介、新産地情報、調査・観察記録などです。

投稿は随時受け付けておりますので、投稿希望の方は、当館へご連絡下さい。

投稿者への別刷りは、50部までは無料です。それ以上の印刷については著者負担とします。

なお、投稿原稿は紀要に掲載後、インターネット上で全文を公開します。投稿にあたっては、公衆送信権を含む著作権を当館に帰属して頂きます。

執筆にあたっては、以下の投稿要領・執筆要領を参照の上、原稿を作成ください。

1 投稿要領

<提出方法>

原稿は手書きまたはパソコンで受け付けます。投稿の際は、別紙に氏名・タイトル・連絡先を明記して下さい。

手書き原稿の場合は、縦書き・横書きのいずれも400字詰め原稿用紙を使用して下さい。

パソコン原稿の場合は、テキスト形式もしくはMS-Word形式で保存したデータを、打ち出し原稿と共に送り下さい。

データでの提出は、USBメモリもしくはCD-Rで送付下さい。電子メールでの提出にあたっては、投稿用のメールアドレスを別途指示しますので、事前にご連絡ください（博物館の代表アドレスでは受け取れませんのでご注意ください。）

原稿は「紀要原稿在中」と赤書きの上、下記の浦幌町立博物館宛に提出ください。

〒089-5614

北海道十勝郡浦幌町字桜町16-1 浦幌町立博物館

電話：015-576-2009

2 執筆要領

<言語>

本文は和文に限ります。ただし、タイトル、氏名、所属には英語表記を御用意ください。また、英文アブストラクトを付ける事もできます。

学名、欧文用語および数字は半角文字で記し、句読点はそれぞれテン全角（、）および全角マル（。）とします。

<引用文献>

文献は、原則として本文中に引用した文献のみをとりあげ、和文、欧文を含めて著者名のアルファベット順に配列して下さい。

本文中での引用は（持田・加藤2001a; 持田2002）、持田ほか（2001）、(Mochida & Kato 1995, 2001b, c)、Mochida et al. (1997)を原則とします。なお、縦書きの場合は、原則として漢数字で表記下さい。

(例) 持田誠 (二〇一五 a)

下記の表記例を参考にして下さい。

a. 論文の場合は、著者名. 発行年. 表題. 掲載雑誌名 巻(号): ページ. と表記する。

(例) 上赤博文. 1995. 田手川の植物群落と植物相. 佐賀自然史研究 1(1): 5-16.

b. 単行本の場合は、著者名. 発行年. 書名. ページ数. 発行所, 発行地. と表記する。

(例) 伊藤秀三. 1994. 島の植物誌. 246pp. 講談社, 東京.

c. 単行本(分担執筆)の一部を引用する場合は、著者名. 発行年. 章名. 本の編者名, 書名. 章のページ. 発行所, 発行地. とする。

(例) 長田芳和. 1997. ニッポンバラタナゴ. 長田芳和・細谷和海(編), 日本の希少淡水魚の現状と系統保存一よみがえれ日本産淡水魚一. pp.76 - 85. 緑書房, 東京.

<脚注>

脚注は本文末にまとめて記述します。表記は(註1)の形式とします。本文中では下記のとおり表記して下さい。

(例) …と考えられている(註1)。

<図表と説明文>

図表番号は写真も含めて図1、表1とします。

図版、写真、表は、本文へ貼り付けず、1点ずつ別途お送り下さい。また、図版データはJPGで、表データはエクセルの形式で提出願います。

図は図表、図版とも完全原稿とし、余白または裏に著者名、番号、天地を明記して下さい。また、本文の打ち出し原稿の右余白に図の挿入位置を書き込んで下さい。ただし図版の説明文(キャプション)は図版にはめこまず、図表番号と説明文を別紙A4用紙に記入して下さい。図表の説明文には英文を併記することができます。

(2016年3月制定)

浦幌町立博物館紀要 第23号

ISSN 2189-4787

発行日 2023年3月31日

編集・発行 浦幌町立博物館
〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町16番地1
電話 015-576-2009 FAX. 015-576-5834 (図書館)

印刷所 大同出版紙業株式会社
〒080-0017 北海道帯広市西7条南6丁目2番地
電話 0155-23-5107 FAX. 0155-23-9032